連句

猫蓑作品集Ⅲ

序

本書は平成四年度における猫蓑会会員の作品、歌仙二十八巻・二十韻五十三巻・半歌仙四巻、それに百韻一巻を収めたものである。これはもちろん、会員各位の全作品を網羅したものではないが、この一年間の精進の成果を示すものであろう。

連句はこのところ復興の兆が著しいが、それは量的・外面的な現象で、その内容たる作品は蕪雑・生硬なものが多く、近ごろは連句を遊びとだけ考えて、無心所着、付味も転じも考えない作品も多くなって来た。

その間にあって、私どもは終始一貫して、「冬の日」のロマンティシズム、「猿蓑」のさび・しおりの典雅さ、「炭俵」の軽みにあこがれ、それらをどのように新しい

現代作品の中に生かし得るか、努力して来た。今年のこの「猫蓑作品集Ⅲ」はどれほどこの目標に迫っているか、これが見所であろう。

このようにはっきり目標をもった作品集を毎年出すのは楽しみである。何時、我々は芭蕉様の足許に到達できるであろうか。おそらく前途は長くてけわしいだろう。各位もこの辺りで新しい草鞋に履きかえて、気分一新、御努力を期待する次第である。

平成五年一月十日

東　明雅

目次

序　東　明雅

歌仙　たかんな　膝送り　曹人・時彦・明雅　8

秋扇　秋元正江　捌　10
盆の月　市野沢弘子　捌　12
舌鮃　梅田利子　捌　14
遠蜩　大窪瑞枝　捌　16
竹伐るや　桑原美津　捌　18
立春や　上月淳子　捌　20
冬至　小林千雪　捌　22
青蔦の門　米谷貞子　捌　24
鴨　雑賀遊　捌　26
聖五月　坂本孝子　捌　28
遠き日　文音　俊一郎・藍・時代　30

秋扇や　真田光子　捌　32
十番の秋　式田和子　捌　34
入彼岸　文音　和子・玄磨　36
秋の声　篠原達子　捌　38
秋冷の　膝送り　孝子・元子・瑞枝　40

女人高野　下鉢清子　捌　42
小名木川　杉内徒司　捌　44
残る虫　副島久美子　捌　46
梅雨晴　瀧川雅代　捌　48
陽の光　文音　園生・啓世　50
初芝居　中田あかり　捌　52
虹立つや　原田千町　捌　54
肉饅頭　独吟　健悟　56
初秋の　水鳥ますみ　捌　58
梅の息吹　山口みづゑ　捌　60

さみどりの……山崎一恵　捌　62
二十韻
躁鬱……文音　明雅・多迦夫　66
秋時雨……秋元正江　捌　68
河骨……文音　篤子・砂洲男　70
青き踏む……市野沢弘子　捌　72
七五三……稲葉道子　捌　74
繭玉……内田麻子　捌　76
柚子の軒……大谷規美子　捌　78
後南朝……両吟　孝子・瑞枝　80
冬に入る……小野シズ　捌　82
月山……加藤治子　捌　84
月の海……加藤道子　捌　86
萩の露……神谷安子　捌　88
新樹……木場田文夫　捌　90
秋の蚊……倉本路子　捌　92
一行の……桑原美津　捌　94
障子貼る……上月淳子　捌　96
きのこ飯……後藤志津枝　捌　98
秋の風……小林千雪　捌　100
葡萄一顆……五味蓉子　捌　102
秋日落つ……近藤守男　捌　104
夏霞……雑賀　遊　捌　106
あぢさゐの房……文音　孝子・貞子　108
糸瓜……佐古英子　捌　110
セルの袴……式田和子　捌　112
更衣……篠原達子　捌　114
半夏生……繁原敏女　捌　116
大暑……下坂元子　捌　118
秋深む……杉江杉亭　捌　120
風鈴……杉山壽子　捌　122
立秋……須田智恵　捌　124
一葉忌……副島久美子　捌　126
野分雲……瀧川雅代　捌　128
額あぢさゐ……武村利子　捌　130
薄暑……橘　文子　捌　132

烏瓜……塚本泰子 捌 134
夏深し……長崎和代 捌 136
曝書……中島啓世 捌 138
山眠る……中田あかり 捌 140
木の実降る……原田千町 捌 142
藤の風……東郁子 捌 144
買初や……文音 冬乃・健悟 146
高遠の花……文音 明雅・隆秀 148
赤とんぼ……両吟 健悟・孝子 150
竹伐り……本田八重子 捌 152
山茶花……町田順風 捌 154
葉鶏頭……松田多恵子 捌 156
白桔梗……松本碧 捌 158
秋近し……文音 政志・和子 160
秋の陽……村田冨美 捌 162
散紅葉……矢崎藍 捌 164
時雨るるや……山口みづゑ 捌 166
秋近き……若尾よしえ 捌 168
能登の冬……文音 降一・政志 170
半歌仙
かぎろひ……岩井啓子 捌 174
夏蝶や……真田光子 捌 176
夏立つ……下鉢清子 捌 178
引鶴や……八角澄子 捌 180
絵蠟燭……本屋良子 捌 182
百韻
酔芙蓉……膝送り 正江・千雪 志げ子・達子 淑子・好敏 186
あとがき……下鉢清子 189

✠ 歌仙

たかんな

たかんなの寺の中まで郵便夫　古館曹人
雨があがると鳴ける松蝉　草間時彦
ソーダ水チーズケーキを誂へて　東明雅
里の果より女三人　人
大寒の月照るばかり坂の上　彦
今年も壁にすが洩りの跡　雅
風強く腰痛とくにはげしかり　人
釣の支度に手入する竿　彦
新婚は遠くアマゾンジャングルへ　雅
一糸まとはず湖に抱かれ　人
真白き下着にしとど夜の露　彦
相撲に負けてひとり寝る月　雅
膝小僧ふた山つかみ冷まじく　人
べったら市の遠きざはめき　彦
贋札の沙汰も何時かはおさまりぬ　雅
壬生狂言のぢゃらんぢゃらんと　人
花簀薪がくづれて燃え立ちし　彦
春のコートのやや寒き宵　雅

膝送り

街頭(ナオ)にこのごろ多き異邦人　雅彦
場外馬券はづればかりぞ　人
我慢してこぼさぬ前の泪ため　雅
嬰児胸に雪女郎佇つ　彦
常陸坊海尊がわが背の君よ　人
泥棒猫とののしられたる　人
喜寿となり傘寿となるも夢の夢　雅
桔梗なでしこ蕾ふくらみ　彦
月読の命に注ぐ吟醸酒　人
龍田の姫を偲ぶ俤　雅
桟敷より覗けば髪の触れあひて　雅
股ァくぐれと舞台正面　彦
時(ナウ)は今降りしきるなり虎ケ雨　人
鳴立沢もどぶ川となる　雅
杖を引く畳の上にうしろ影　彦
けはしさありて如月の空　人
現世の現の花に滝桜　雅
文学館に雛の饗宴　執筆

平成四年五月四日　首尾
於　俳句文学館

秋扇

今宮水壷

これやこのくらげの骨の秋扇
語り伝へる初月の縁

秋元正江

文化祭天幕やうやく仕上りて
テレビ画面にうつる知りびと

篠原達子

児の欠伸猫もつられて生あくび
白玉だんご浮いてくる鍋

上月淳子

俊寛の遠流の島か雲の峯
木偶人形の稽古はじめる

浅賀淑代

人妻の指触れてより焦がれそめ
上つ方から操乱れし

達淳

ヘアサロン情報仕入れに週いち度
駅前通り予備校の増え

達淳

遠火事に帰る野次馬昇る月
また更めて寝酒少々

壷淳

購ひし薩摩切子にややの罅
式目破る旅の道連れ

壷代

鼻息で吹き返すべし花吹雪
巣立鳥たつ未だおどおど

同壷

秋元正江捌

淳

何見（ナオ）しと覚えもあらず春の夢　同
わが念持仏掌の内　江
執刀医手術の日取りきまりたり　達
只ひたすらなオカリナの笛　淳
熟れうれのパイン畑でディープキス　代
のっぺらぼうが口紅を塗り　壷
五億円一転辞任に追ひ込まれ　淳
あらら不覚よ櫂を流しぬ　同
なほ生きん燠火のごとき闘志もち　壷
婆のつもりし家庭麻雀　達
名月をチャイナタウンのビルの間に　代
やっちゃばひそか螻蛄の鳴く声　同
あれも逝きかれも逝ったと稲架かけつ（ナウ）　淳
身にめぐらする壷のいくつか　壷
銭湯のついでにはがき頼みたる　達
渡り漁夫なり訛りめだちぬ　同
花明り遠敷の里の道祖神　江
古着ねむれる土蔵陽炎　代

平成四年九月六日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

盆の月

市野沢弘子　捌

ふるさとや間近く盆の月仰ぐ　市野沢　弘子
黒々茂る庭の梶の葉　山口　みづゑ
お持たせの鯊の天ぷら食卓に　副島　久美子
児の悪戯に逃げてゆく猫　上月　淳子
弦楽器習ひ始めは型通り　佛渕　健悟
釦を押して効かす冷房　久
旧ソ連核解体に走る夏　悟
受胎のマリア糸をつむげる　ゑ
だまされて泣くのも今は男なの　淳
思ひ出の鍵抽き出しの奥　久
留学で酒を覚えし皇太子　悟
倫敦塔にかかる冬月　ゑ
神経症風邪も引き込む一人住み　久
こぼせしパンに鳩の寄り来る　淳
参謀の早や動き出す町長選　悟
川向ふには老舗並びて　淳
花万朶勝利のオール高々と　同
春睡の夢さめし文机　ゑ

鉦太鼓壬生念仏のにぎやかに　久
杖をつきつき帰る大叔父　悟
暗き納屋藍のつぶやく藍の甕　ゑ
生徒の苗字ぜんぶおんなじ　同
震度3蚊が刺すほどのこともなく　悟
ヒッチハイクが愛の始まり　ゑ
離れない離さないよと抱き合ひ　淳
現に聞くは鵺の鳴く音か　ゑ
妖かしを射殺すといふ剛き弓　悟
代々の墓山の中腹　久
満月の雫を浴びて何思ふ　同
ファックス受けるやや寒の部屋　悟
秋祭昔の友は皆逝きて　淳
またも売れ出す清張の本　久
砂時計しかけてさばくスケジュール　ゑ
ぶらんこゆらし煙草いっぷく　悟
単線の駅舎に余る花吹雪　弘
白い蝶々袂ふれつつ　淳

平成四年八月二十六日　首尾
於　俳句文学館

舌鮃

梅田 利子 捌

俎にそしらぬ貌や舌鮃	梅田 利子
暑気払ひする縁の広々	下坂 元子
布晒し取り込む人に月出でて	瀧川 雅代
県道沿ひに並ぶ自販機	山崎 一恵
くるくると落葉のワルツ始まりぬ	八角 澄子
朱欒を描く油彩厚塗り	元
火山灰(ウよなは)掃けどすぐまた積もる桜島	代
猛きをのこは片頬で笑み	澄
三つ指を付くも貴方の好みにて	利
柱時計の響く太梁	元
新胡桃割ってケーキに飾り付け	恵
小人の童話はしゃぐ児に月	同
彌撒終へし神父の長衣そぞろ寒	元
トカレフ密輸ひたかくす罪	澄
つつかれて雪隠虫は丸くなる	同
正体知れぬ呆けの妙薬	代
野幇間(ノダイコ)のかっぽれも出て花盛り	元
粋でいなせな大江戸の春	澄

突堤（ナオ）に島影殖えて風光る　恵

進展祈る四島返還　代

子孫へと伝へむ古地図裏打ちし　元

昔気質の抜けぬご隠居　代

炎昼に檻のライオン眠りこけ　元

溶けて流れるアイスキャンデー　恵

束の間の口吻け燃えし防空壕　代

国破るるも裂かれざる恋　澄

金メダル唯ひたすらに走りぬき　代

遺伝子組み換へフラスコの中　元

本尊は秘仏に在す月円か　澄

とろけるやうな早稲酒の味　恵

赤い羽根（ナウ）ブローチ代りウェイトレス　恵

母の便りは村のトピック　代

展望車開通式も間近なり　恵

我も我もと穴を出る蟇　澄

老大樹そっと撫でやる花の幹　代

弥生惜しみて尽きぬ閑談　利

平成四年八月四日　首尾　恵

於　山崎邸

遠蜩

大窪 瑞枝 捌

暁の遠蜩を夢にかな　大窪瑞枝
月淡々とかかる山の端　下坂元子
超特急穂芒の原貫きて　坂本孝子
お茶に弁当ワゴン押し来る　雑賀遊
拾ひ読み栞をはさむ文庫本　中川哲
甘撚り毛糸ゆるく巻きあげ　元
利猪口の紋のきりりと寒造　孝
素足すんなり裾をからげて　元
木屋町に青道心の通ひつめ　孝
虫籠窓より覗く薄闇　遊
旧式のエレベーターのごとごとと　同
ゴスペルソング混じる呻吟　元
注射痕双の腕に月暑し　孝
柳川鍋の午蒡ささがき　哲
やっとかめにゃあもにゃあだぎゃにゃあにゃあにゃあ　遊
パーンアップで写す3カメ　孝
花明り吹上御所の車寄　哲
雉放ちやる芝草の岡　孝

メーデー（ナオ）の揃ひの帽子まだ続き　遊
電動ミシン叩くジーンズ　孝
広口壜もやしそれぞれ育ちをり　遊
ＤＮＡの鎖捩れぬ　孝
つまぐれるクルスの銀の重たくて　元
馬橇走らす逢引の森　遊
裏切りを詰ればはげし雪しまき　瑞
硝煙ふっと吹ける髭面　孝
メコン河変らぬ流れ茫洋と　元
高床の小屋寝まる涼しさ　同
過ぎし旅地図を拡げて語る月　遊
鷺草そよぐ風に翔つかに　元
捨（ナウ）てた気で生きた生命の踊り笠　孝
寺山修司の歌を愛しみ　哲
嫌煙権好煙権ときりもなく　遊
カリヨン時計のどかなる昼　哲
花浴びてジャングルジムの僕ひとり　瑞
綿飴舌に溶ける春愁　哲

平成四年八月二十六日　首尾
於　俳句文学館

竹伐るや

桑原　美津　捌

竹伐るや石のひとつを日の去らず　桑原美津
望月を待つ庭の広々　梅田利子
赤い羽根帽をかしげてそれぞれに　山崎一恵
バターキャンデーポケットの中　篠原達子
一輪車上手に乗れる得意顔　上月淳子
かじけし猫が人にすり寄る　瀧川雅代
冬薔薇バロックの曲流れきて　淳
シャガール見つつまだ来ない彼　達
ゆれ動く心互に摑みかね　利
よせては返す波のしぶきよ　恵
亜米利加の大陸発見五百年　代
ふえる御器噛けふも追ひかけ　同
河童忌の鼻先暮るる宵の月　淳
政界批判の葉書積みあげ　利
待つ椅子も満員となる理髪店　恵
傘の応援ゆるぐ球場　同
花筵どんと持ち込む大吟醸　達
新いかなごの釘煮送られ　淳

凧作り教室始まる公民館　達
　真西に吹ける煙突の風　利
塩の道瞽女の如くに連りて　同
　ひすいを求め下る川筋　代
麻薬犬そばに引きつけ息白く　同
　男まさりの制服の美女　利
はにかみつ脱げば匂ひし絖の肌　恵
　マリヤと崇め吾を忘れし　同
住所録整理し備へるお葬式　淳
　木の間がくれに天守閣見え　代
初月のそっと昇りし山の端に　恵
　ちちろ聞きつつ句の思案する　達
ジーパンでこすって林檎丸かじり　淳
　補綴・歯周科・歯列矯正　達
辞書を繰り老の手習ひ飽きもせず　淳
　雨があがれば畑を耕す　代
江戸彼岸花爛漫と咲き満ちて　利
　春惜しみつつ走る高速　津
　　淳

平成四年十月十四日　首尾
於　池袋談話室

立春や

上月　淳子　捌

立春や少年大志抱けよと　上月淳子
梅凛々と藩黌の庭　坂本孝子
蓬餅彩絵の皿にとりわけて　中川哲
切抜き囲み旅の相談　篠原達子
ファックスの鳴り出す予感月の窓　大窪瑞枝
遠山の端を渡る雁　副島久美子
小重陽多摩の銘酒を賜りし　同
襟足白きひとの訪れ　哲
外科室に入り恋情を断つならん　孝
カランひねればどっと出る水　達
原子炉のボルトいくつかゆるみたる　枝
陶枕蹴って起す神様　孝
月涼し故郷の町歩みをり　哲
ミニカーを売るテキ屋濁声　孝
サーカスの侏儒は犬に物語り　同
全自動にて終る洗濯　枝
花前線津軽海峡越ゆるころ　達
カルチャーセンター習ふ折鍋　淳

財（ナオ）テクにはげみしも夢亀の鳴く　枝
過剰包装煎餅の箱　久
解きにくき予備校生の微積分　哲
少し私情の入る採点　孝
寒昴ＹＥＳの文はまだ胸に　枝
床暖房に裸身結ばれ　哲
礼拝の時を知らせる鐘なりて　同
新聞まるめ叩く御器噛　久
定年の悠々閑々肥ゆる夫　達
象牙翡翠と根付とりどり　枝
曼珠沙華やさしい人から土になる　達
月影にふと萎る小面　孝
秋袷紬（ナウ）のしつけ抜いて着せ　達
二十世紀はカウントダウンに　枝
語り部の録音取材趣味にして　久
床の中から聞きわける雨　枝
あかときの花のほのかに白みつつ　淳
いかなご釘煮入荷新物　久

平成四年二月五日　首尾
於　俳句文学館

冬至

小林千雪

ちぎれ雲茜に染めし冬至かな　小林千雪

囲炉裡の鍋に煮ゆるなんきん　秋元正江

スキーヤーどっと降りたつバス停に　水鳥ますみ

ウォークマンでロック聴きつつ　倉本路子

蹲まる小犬抱き上げ月明り　村田冨美

垣根に沿ひてこぼれつぐ萩　真田光子

墨東の行きどまりなる生見玉　江

隠れて読みし禁断の本　み

はじめての酒に酔ひ痴れしなだれぬ　美

ベイエイリアのホテル満室　み

クレーン車くの字のままに立つ渚　光

砂遊びする子等は泥んこ　美

夏神楽月全身に舞ひ続け　み

母の遺せし藍浴衣着て　光

人を呼ぶ飢えたる国の写真展　路

ほろほろ鳥は群れてお散歩　同

花吹雪九十九折なる杣のぼり　美

負ひし若布のがさと鳴りたる　江

年寄(ナオ)の呼んでゐるなり春炬燵　美
嫁から学ぶ捨てる哲学　光
自らの光を灯す深海魚　路
ひとつめこぞう夢に現れしと　江
無雑作にシャブリかかへて待つ男　み
ペアのマフラーそっと外して　美
会えぬ日の長さの分を燃えつくし　み
からくり時計開きたる窓　江
入院を留守番電話告げてゐる　同
形(なり)美しききらら虫掌に　光
北へ飛ぶ最終便に嫦娥浮く　美
風呂敷包みどびろくの瓶　美
運動会教頭の髯(ナウ)そぞろ寒　江
わが思ひ出の露西亜民謡　路
SPにLP・CDきき分けぬ　み
うから集ひて春深き野辺　光
花ぐもりイーハトーブの賢治館　路
力いっぱい鞦韆を漕ぐ　雪

平成三年十二月二十二日　首尾
於　深川芭蕉記念館

青蔦の門

米谷　貞子　捌

友待つや青蔦の門出つ入りつ　米谷　貞子
紅耀ける卓の桜桃　坂本　孝子
熟睡の児タオルケットに頬埋めて　大窪　瑞枝
コルクの積木箱に片付け　雑賀　遊
笛の音のいつかやみたる宵の月　山口　みづゑ
流れに透きて鰍およげり　上月　淳子
献酬の新酒とろりと薩摩焼　市野沢　弘子
男盛りの挑む政界　孝
足元に思はぬ深き落し穴　淳
グッチの眼鏡ドレスカルダン　孝
ショーファーをじらせ逢瀬は濃密に　枝
齢の違ひを埋める札束　弘
籠り居の火宅の僧に月冴えて　遊
○と書かれし硯学の軸　ゑ
八っつあんを相手にひさぐ古道具　孝
うっかり云へぬ壁に耳あり　淳
追憶がすぐ詩となる花の昼　ゑ
カフェオーレの碗のあたたか　枝

池（ナオ）の面にデコイのやうな戻り鴫　遊
　ひにちぐすりの効いてきし母　同
掃除機でごろねの夫を追ひ立てて　淳
　共にオルグで鳴らす理論派　枝
陪審の死刑を怨む肌の色　孝
　稲光りして降りたらぬ雨　遊
月の下ふるへる君を抱きしめ　弘
　姙り隠す朝寒の衣　ゑ
かけまくもかしこみて打つ大太鼓　孝
　卑弥乎の国か楼観の彫　枝
さみどりの古都の銘菓をことづけん　孝
　台子に凝りし口切の茶事　ゑ
人生（ナウ）の浮沈によぎる雪蛍　孝
　アングラ劇はね走る小ねずみ　淳
ホームにてプロレスごっこ汽車くる間　孝
　山峡の村畑を焼きをり　弘
爛漫の花の木めぐり宴の輪　枝
　イーゼル立てて風光る中　貞

平成四年五月二十二日　首尾
於　米谷宅　弘

鴨

雑賀　遊

いつの間に来し鴨ならん水尾交し
　紅葉散り敷く苑の細道

百武冬乃

香りよきホットレモンを啜りゐて
　オセロゲームに飽きぬこどもら

下坂元子

尺八を喨々と吹く月の前
　芸術祭へ参加決定

篠原達子

角(ウ)伐りの牡鹿猛りつ飛火野に
　トイボーイ又けふも待らせ

桑原美津

寄添へるジーンズの腰ほっそりと
　携帯電話不意に鳴り出す

山崎一恵

久々に民主党より大統領
　日本叩きはほどほどにして

元

灰皿を片手拝みに受取りぬ
　回忌の宴ビール注ぎ合ひ

乃

「山姥」の面影浮ぶ夏の月
　柴の垣根の少し崩れし

元

花盛りワープロとんとはかどらず
　うらうらの春眠気うとうと

恵

雑賀　遊　捌

雑賀　遊

百武冬乃

下坂元子

篠原達子

桑原美津

山崎一恵

元

乃

元

恵

遊

津

達

恵

達

乃

恵

津

乗込(ナオ)みの報せ待ちをる髭男　乃
四輪駆動整備済なり　同
モンゴルにチンギスハンの跡訪ね　津
珍書稀観書集めたる部屋　恵
仄暗き東廓の櫺子窓　元
年増生娘それぞれの恋　恵
ドンファンと言はれしことも遠き過去　達
俯いて噛む鉛筆の尻　乃
鑑別所保護監察と回されて　津
アラバスターのマリア像立つ　元
パレードのシンバル響く秋の街　遊
初月仰ぐ客船の上　元
土瓶(ナウ)蒸やをら取出す旅硯　達
父老いたりな巻紙の文字　元
ラビリンス夢のかけらの散らばれる　達
望遠鏡を磨くあたたか　乃
百二百数へつ登る花の階　遊
つかず離れずしじみ蝶舞ふ　津

平成四年十一月六日　首尾
於　池袋滝沢

聖五月

坂本　孝子　捌

聴き分くる森の鳥語や聖五月　坂本孝子
鈴蘭白く匂ふ水の辺　山口みづゑ
切子鉢ちぎりレタスを盛るならん　大窪瑞枝
足揺りながらテレビ見る児等　峯田政志
どこからか猫集ひくる良夜なり　佛渕健悟
秋風の待つ駅に降り立つ　小林純
小重陽藍の紬を着流しに　ゑ悟
笑ひ上戸がいつか凭れて　枝悟
コーラス部あのリーダーが素敵なの　純
奨学金でドクターも取り　ゑ
寂寞と雪くる前の山毛欅林　枝
鰤街道に昇る凍月　志
なかなかに手強き女性通商使　枝悟
べそかき羅漢の肩たたきみる　志
鬱癒えてわれ電話魔に豹変す　同
アイデア弁当五輪あしらひ
城址を花の名所に村おこし
琴の音やみて暖かき雨

春日傘注文に来る高麗屋　純
　街の喧嘩に走るおまはり　志
宙吊りに身を置きビルの窓磨く　ゑ
　アンモナイトの永劫の夢　純
熟睡せる妃に毒蛇しのび寄り　悟
　秘戯を尽せし後のたゆたひ　枝
二枚刃のシェーバー頤に心地よし　悟
　斜面鋭く残るシュプール　同
夭折の才を惜しむも世の習　孝
　座敷童子と遊ぶじゃんけん　枝
月の路地しまひ湯落とす誰ならむ　同
　伏せ甕の端鳴けるすいっちょ　ゑ
菊談義見知らぬ人を呼び止めて　志
　銀杏くるる菩提寺の僧　純
短大に経営学の講座持ち　ゑ
　ブラインドタッチで使ふパソコン　志
馥郁とスコッチモルト花の宵　孝
　朧に踊る裾長の衣　ゑ

平成四年五月十五日　首尾
於　小林寓

遠き日

佐藤俊一郎

遠き日を詠みし歌仙や旅の秋
　ころころ団栗森へようこそ
藁ぶきの小家に玉兎微笑みて
　多次元宇宙二一〇〇年
めくるめくクリームソーダの泡の中
　海亀のゐる家で働く
くはへたる鉈豆煙管親ゆづり
　兄さん待ってとぞっと流し目
助手席のけふはきのふと違う女
　黄から赤へと変る信号
どん底のそのまた下もある暮し
　孤児でおかれし記憶かすかに
月明り野末の霜と残りたる
　トランペットの音は嘘つき
見かけよりいいお祈りをする牧師
　丸く肥えたる糟糠の妻
花が降るゆがみ茶碗も焼き上がる
　風光る午後サロヤンを読む

文音

矢崎藍
柿本時代郎藍代郎藍代郎藍代郎藍代郎藍代郎藍代郎藍代

進級（ナオ）の少年の頬つやつやと　郎
心臓外科医あざやかな技　代
ハイテクの巨塔の謎の五十階　藍
針なき時計打たれざる刻　郎
夕菅の畑で誰か呼んでゐる　代
あなたが好きといへず行く夏　藍
あの頃が情痴の中によみがへり　郎
濃すぎる紅は似合はないのに　代
漁り舟戻るを待ちて月の村　藍
はるか南に眠る台風　郎
葡萄醸す魔女たる修業の一歩とて　代
囮をかけて城の裏藪　藍
この先（ナウ）で大きく右へ折れる道　郎
若さが国をかへてゆけると　代
しめりたる駅の雑踏小糠雨　藍
去年の暦どこで売ってる　郎
満たされしこともかなしき花明かり　代
酔ひ身をひたす春の潮の音　藍

平成三年十月八日　起首
同四年五月十九日　満尾

秋扇や

真田　光子　捌

秋扇や蹋みてくぐる躙口　真田光子
籠に挿したるやはずにしきぎ　秋元正江
二日月チェロの音低く響くらん　水鳥ますみ
フランスパンの焼き立てを持つ　村田冨美
車から犬と子供が首出して　小林千雪
点となりたる遠泳のひと　倉本路子
赤富士の束の間の刻あざやかに　みゥ
裏観音に祈りたること　江
初恋の想ひ出の町通り過ぐ　美
人妻なれどかるく誘ひぬ　路
禁猟区谿深くして森々と　江
持ち続けたるドイツ魂　み
湯豆腐の崩れはじめを囲む月　雪
納め庚申雑踏の中　美
治虫逝き町子さん逝き吾も老い　路
デジタル時計廻しすぎしか　江
花片が散りかかりゐるおままごと　み
松蝉の鳴く城趾の午後　雪

郵(ナオ)便夫春泥つけてやって来る　江
　置き薬屋の話きりなく　美
くぐり戸を座敷わらしが抜け出しぬ　路
　百蝋燭のひとつ消されし　江
六本木ディスコ帰りのサンドレス　み
　レースのカーテン揺らすくちづけ　光
懺悔室牧師はずっと沈黙す　江
　いっきに飲みし酔醒めの水　雪
太平の夢は鎖国の昔から　み
　張込刑事今日も見廻る　同
路地の奥月祀りゐる媼あり　美
　はるかなる丘渡る雁　雪
触(ナウ)るるよりむかごのはらとこぼれける　路
　悠々自適ままならぬ父　雪
野天風呂湯けむりあがる山の宿　美
　箪笥の上の木目込の雛　路
魚の目に涙を見るか花疲れ　江
　ゆっくり歩く囀りの道　み

平成四年八月十九日　首尾
於　新宿角筈地域センター

十番の秋

式田　和子　捌

十番に秋の訪れ風の色　式田和子
かなかな蝉の鳴きやみて月　豊田好敏
大広間菊活け終り塵もなし　佛渕健悟
皿鉢料理を卓に並べる　雑賀遊
欠伸する猫の後脚のびきって　中川哲
煙草ぷかぷかさぼる寒取り　中川凡
冱(ウ)つるまで穂高の小屋に籠りたき　若松隆一
戯れに書く宿帳に妻　山崎光夫
口紅と銀のベレッタ鏡台に　悟
ＰＯＳでコンビニ品揃へする　哲
時差呆けと知りつつ強き酒を飲み　渋谷千鶴子
極暑に我も猿も反省　遊
人絶えて月に夏行の終机　夫
先祖の田んぼ売りし壇越　悟
中三の孫は筋骨隆々と　哲
カメラむければあどけなき顔　凡
花万朶警備介護所天幕張り　遊
浮世うららにのんびりが勝　中川キヌ

油彩にて春涛の藍濃く薄く　五反田屋　紀春
　アテネ神殿白き廻廊　敏
寅さんはここでもはるか啖呵売　悟
　もろ肌脱いで後疵見え　鈴木　恭子
日曜の父兄参観どうしよう　悟
　しぶしぶあけるうすきがまぐち　長尾　朋子
旧街道千本格子海鼠壁　遊
　寒さも寒し宵のあひびき　一
きぬぎぬの月に乳房のまたうづく　哲
　荻のそよぎか低くめりやす　式田　きょう子
啄木鳥ははらからに似し癖のあり　好
　運鈍根でのしあがる夢　遊
開墾の節くれだった手の柔み　恭
　大統領はけふも安泰　凡
晩餐はチルドビーフのステーキを　朋
　隙間を埋める産業もある　一
それぞれに花を持たせる老の知恵　和
　詩集にはさむ菫デージー　春

平成四年八月二十一日　首尾
於　麻布十番ブルーペティ5F

入彼岸

遠会釈して坂の道入彼岸　式田和子
思ひもかけず積みし淡雪　河野玄麿
合方と春挽絲をためすらん　麿子
出席の字に大き丸あり　麿子
彩色のステンドグラス月に映え　麿子
手いれ済ませし新涼の庭　麿子
盛り崩れするほど秋刀魚かつぎ来る　麿子
ありがたすぎて迷惑といひ　麿子
元ミスとテニスペアーのくじをひき　麿子
艶種を売るタレントの技　麿子
鉄瓶の湯気しゅんしゅんと深き闇　麿子
羊の数をまたも一から　麿子
富士行は手甲脚絆つけしまま　麿子
冷房完備貸切のバス　麿子
ペン・ノート・薬で囲むテリトリー　麿子
毎週火曜教授回診　麿子
人の世はのぞきからくり月と花　麿子
アパレルブーム霾晦りして　麿子

文音

若駒（ナオ）は知らず礼束舞ふ修羅場　麿子
小指がなくて開けにくき缶　麿子
泰西の名画を壁に貼り回し　麿子
食前酒とてすすむ梅酒　麿子
女郎蜘蛛やんはり搦め捕りにけり　麿子
まはしてほどく黒繻子の帯　麿子
口答へしつつもいつか夢心地　麿子
冬至南瓜がほくほくと煮え　麿子
三年目田舎暮しが板につき　麿子
パソコンいぢり情報は過多　麿子
明けの月オリンピックも幕を閉ぢ　麿子
乃木忌を知らぬ外車ずらりと　麿子
鵤（ナウ）贅のごとく見らるる老の醜　麿子
旧の仮名にはルビもふられて　麿子
逆転の満貫決めし北の風　麿子
ちょっとかしいだ椅子レザー張り　麿子
花の門仄かに伽羅のたゆたへる　麿子
掌にそとのせる紅貝　麿子

平成四年三月二十日　起首
同四年九月十二日　満尾

秋の声

篠原　達子　捌

御手洗の水ひと筋や秋の声　篠原　達子
野萩の叢にかかる夕月　百武　冬乃
土瓶蒸香りも高く運びきて　瀧川　雅代
たしなめられし猫の取りっこ　副島　久美子
岩攀ぢしザイル、アイゼン裏庭に　下坂　元子
夏期講習も残り少なく　梅田　利子
お六櫛買ひ求めたり奈良井宿　久利
そしてああしてかうなった仲　久利
不倫などもう平気だと恋重ね　代
斜め坐りに噛る烏賊焼き　代
世界からプライムレート、ファックスで　乃
人間ドック欠かさない父　久
寒月に尺八嘸と吹きならし　代
座敷ぼっこの覗く戸襖　元
※「降りるひと済んだらどうぞ」車掌さん　利
祝儀にもらふ軽き引物　同
野点傘花びら受くる楽茶碗　元
垣根をくぐりあそぶ子雀　代

和布(ナオ)刈竿舁きて渚を行くならん　元
ハーブ公園つくる村長　乃
絵の修業巴里暮らしも永くなり　久
符丁囁き渡す拳銃　元
旱星、ウオッカ、テキーラ、ヘビーラム　同
窓にぴったりやもり吸ひつく　代
風呂上がりそれと解らぬ化粧して　久
観音に似し眉のいとしき　乃
マザコンもロリコンもゐる住所録　同
エンデバーにて宇宙遊泳　同
月賞でつ故郷(くに)なつかしむ友と我　利
小豆あらひの音のかそけさ　同
赤い羽根背広の衿に出勤す　元
真向法で誇る体力　久
新刊の贈呈本が卓上に　元
うつらうつらと留守番の午後　代
木偶芝居余韻に歩む花の雨　久
山の端へとわたす初虹　達
利

平成四年九月十八日　首尾
於　深川芭蕉記念館

※東北地方の訛り

秋冷の

秋冷の瑠璃水底に堂ケ島　坂本孝子
帰燕の彼方うっすらと月　下坂元子
運動会幼稚園児の旗振りて　大窪瑞枝
バターライスにソーセージ焼く　孝
設計図ポストモダンを語り合ひ　元
単車寄せ置く青蔦の門　枝
少年の夜干の衣に風すこし　孝
拗ねてそむけしうなじ可愛ゆき　元
スラム街奉仕の尼の祈りをり　枝
投げ銭を浴び猿と猿曳　孝
重ねたる屠蘇健やかな酔心地　元
酢海鼠つるとすべる塗箸　枝
ぬらくらと北方領土戻り来ず　孝
彼のバラライカけふも唄へる　元
ロフト出る男に月の冴返り　枝
春外套に匂ふ虫除け　孝
花しづか瓦寄進の寺にして　元
媼茶を揉むうすべりの上　枝

膝送り

旅先(ナオ)の籠負ふてみる農具市　孝
バブルのつけは五億越えたり　元
蠢いて無限増殖エイリアン　枝
世に出た頃に名乗る父親　孝
別荘の湯殿に裸身かしづかせ　元
伯爵夫人鞭を鳴らしつ　枝
チェンソー響きて眩し雪の峰　孝
土偶ほっかり虚空みつむる　元
治まりし太古の民は主を知らず　枝
歩けば裾に着きし草の実　元
十六夜の胃ぐすり髭にこぼしけり　孝
唐墨磨らせ修す子規の忌　枝
文化祭国(ナウ)さまざまにパネリスト　孝
家並み保存小京都とて　元
朝練の自転車に積む剣道具　枝
CDカセットイヤフォンで聞き　元
花びらの吹き寄せられし楽屋口　孝
染抜きのれんくぐる蝶々　枝

平成四年九月十五日　首尾
於　伊豆堂ケ島

女人高野

下鉢　清子　捌

女人高野斑雪の磴を登りけり　下鉢清子
軽きコートも春浅き頃　東郁子
親猫は仔猫を銜へ帰り来て　原田千町
本に倦みしか眼鏡置かるる　市野沢弘子
対酌の酔に歪みし望の月　杉内徒司
榠樝の香り部屋に漂ふ　鈴木千恵子
落鮎（ウ）の籠提げてくる杣若く　今宮水壷
ルージュ引く身の少し弾んで　弘
ペーチカにプラトニックの恋は憂き　恵
もとへお戻り記憶合金　町
反芻を繰り返しつつ牧の牛　司
ハングライダーこれぞ快感　町
昼の月蟹の呟き聞くごとし　壷
意味のあり気でさうで無さそで　司
前衛のピカソを目ざす画学生　弘
天皇も師と仰ぐひとあり　恵
渡殿に坐し九重の花惜しむ　郁
たどたどしくも生まる蠅の子　壷

海風（ナオ）に凧どこまでも揚がり行く　弘司
朝採り野菜買ひし駅前
大臣のお国入りする笑みこぼれ　壷同
セクハラ課長尻をこそぐる
ＣＴスキャン己がスライス見せられて　町郁
頼むものなし山の神留守
一夜妻だったつもりが五十年　恵弘
抱いて抱かれて末はおぼめき
ウイグルの砂漠に遺る門もあり　町恵
調子はづれのオルゴール捲く
鳥籠の鸚鵡と話す月さやか　弘郁
運動会に児の懸くる夢
茸（ナウ）飯残りしものはおむすびに　司町
今はナナハン曲り屋の主
黒タイツジョギングシューズ颯爽と　郁司
うちの魚は網代直送
磧湯の流れに乗りし花筏　清恵
段々畑老の耕す

平成四年三月一日　首尾
於　関口芭蕉庵

小名木川

小名木川岸うつ浪も暮の秋　郁子
　庵を照らすまほろばの月　路子
花芒我も光の精ならん　K
　息を切らせて犬を追ひゆく　海砂
鯛焼の行列つくる女子高生　千恵子
　手編みマフラー色もさまざま　雅辺
宇宙より蒼き地球を眺むれば　K
　無重力さへ愛を育む　恵
さりげなく髪なでられし懺悔室　路
　思ひ違ひが変へる人生　同
履歴書に多芸多才と書添へん　辺
　派中派つくる政界の渦　K
月赤し鬼虎魚皮剥毒水母　郁
　夏風邪なほす他人に移して　路
結末を知りて音読せがむ子ら　恵
　北斎江戸のイラストレーター　同
群青の御空筑波の花吹雪　K
　逃水を追ひ高速路馳せ　郁

杉内　徒司　捌

団扇張る里の祖父母の忙しく　辺
手乗り文鳥仕込むひととき　砂
近頃は軽い煙草が流行りとか　辺
電撃婚約りえ貴花田　恵
肌と肌ぶつかりあってころがれり　K
湯気ほっかりと鮟鱇の鍋　郁
軒の雪どうと落ちてはまた積もる　砂
生肝を盗る黒塚の婆　郁
二まはり男が若い恋もあり　同
惚れた弱味で許すわがまま　辺
ウンター・デン・リンデン妻と月仰ぐ　K
讃美歌響くドーム爽か　郁
まどろみて葡萄酒醸す樽の内　恵
泡の如くに過ぎし生涯　郁
蓬萊に崑崙訪ふが夢なりき　恵
学徒出陣雨の神宮　K
花に酔へ獅子身中の虫もまた　司
空高く舞ふ紫の蝶　徒　砂

平成四年十一月一日　首尾
於　深川芭蕉記念館

残る虫

副島久美子　捌

残る虫音の澄みゆくやひとところ　副島久美子
紅葉散り初む谷戸の細道　蒲原志げ子
子供会ケーキふっくり焼くならん　篠原達子
勝手知ったる団地付きあひ　梅田利子
しんかんと駅前広場仰ぐ月　瀧川雅代
新涼の風犬の寝返り　小林千雪
秋深し白鳳仏は笑み給ふ　達志
細身はんなり憧れの女　代雪
求愛も母が伝授のお坊ちゃま　代
英王室は御乱脈とか　志
山越えてローマの遺跡辿りゆく　利
パントマイムのピエロ人垣　代
月覗く冷酒酌みつつ銭数へ　志
いさき串打ち塩をたっぷり　利
家族には告げずさっさと入院す　代
机の下に煙草吸殻　志
花吹雪駐在さんは巡回中　達
心うきうき春のスキーに　代

はるかなる初虹湖を眼下にし　雪
優佳良織の彩はつややか　利
五十路よりライフワークにまっしぐら　同
ひとの振り見て我振りは見ず　志
頬被り時代遅れの泥棒で　同
値切りまくって大年の市　達
ダイヤリーデイトの記録ぎっしりと　利
別れ上手は恋の勲章　代
緞帳が降りてどよめき鳴り続く　利
喚問をされ揺れる国会　代
群雲に月の隠るる伊勢の杜　雪
木の実を踏みて偲ぶふる里　同
さわやかに長寿全う野辺送り　達
ペンが友達ミニコミ誌出す　同
リフォームは先ずリビングと洗面所　志
宇宙飛行は夢のまた夢　雪
花屑の模様となりて雨上がる　久
テレビ放映曲水の宴　達

平成四年十一月二十日　首尾
於　池袋滝沢

梅雨晴

瀧川雅代　下坂元子　梅田利子　八角澄子　山崎一恵

つくばひの水飲む猫や梅雨の晴　瀧川雅代
香りほのかに垣の繡線菊（しもつけ）　下坂元子
駅頭に「ご一行様」出迎へて　梅田利子
新刊漫画立ち読みの児ら　八角澄子
かろやかにハミング流る月の窓　山崎一恵
銀のナイフで青梨をむく　元利恵
穴（ウ）道湖に姿を映し山粧ふ　利恵
しめし合はせて通ふお稽古　利
臑噛りデートの払ひふたり分　同
オブザーバーのサミットの席　澄
聖堂の鳩いっせいにとびたちぬ　元
躁のひと診る医者は欝ぎみ　同
月代に熱燗旨き屋台店　利
御用納の堆き反故　澄
リーチ・ツモまた満願のにくい奴　恵
バブル以前にマイホーム建て　利
ふるさとの父母招き花の宴　澄
かの賑はひを語る魚島

瀧川雅代　捌

春宵（ナオ）に敦盛偲ぶ笛ならん　元
飛天の姿描かれし壺　恵
念願は世界制覇のカーレース　利
蘭語ギリシャ語汗の独逸語　代
卓上に蒜・人参・蝮の粉　利
炎の恋に酔ひ痴れるまま　澄
王族といへど女体のあはれさよ　代
老をかくせぬ手の甲の皺　利
A・C・C四十八階景広し　同
並んで賞づる端正の月　澄
稲架掛けも村中挙げて無事に済み　同
ひっそりと鳴く磴の蟋蟀　恵
抑留（ナウ）の昔想へば夢のごと　同
パソコン通信ガイド繰りつつ　利
アドリブの受けに受けたるはまり役　元
大入袋あがる神棚　同
廻転の喫茶室より花の雲　代
遠目鏡にて眺むのどけさ　恵

平成四年七月八日　首尾
於　山王山崎邸

陽の光

文音

陽の光こぼれ滴る若葉かな　内田園生

新茶淹れしと運ぶ濡れ縁　中島啓世

異国より孫の似顔絵送り来て　生

ジグソーパズル飽くこともなく　世

三日月は刃のごとく澄み切れり　生

湖しづもりて鳴ける蜩　世

女郎花縫って待ち人あらはるる　生

まじる銀髪かほる大正　世

横顔に思ひ出秘めて初老妻　生

笠松並木ナポリポンペイ　世

名物の盥程あるピッツァ食べ　生

夢で遊ぶはまろき山々　世

牧溪の鶴は故郷を偲ぶかに　生

凍月浴びて露天温泉　世

毎日が日曜なれど暇はなき　生

どこ迄続くボレロメロディー　世

花の宴西行の歌詠む人も　生

指さす彼方霞む大寺　世

千代川流し雛のさん俵　世
引く釣糸にひとは気付かず　生
出刃研いで夕餉の厨獲物待つ　世
アル中患者のクーデター劇　生
ロシヤてふなつかしき名の戻り来し　世
代田をよぎる片雲の列　生
ばら色に没り日うつらふ海に来て　世
ホテルの裏は目のやり場なし　生
このノック手鏡のぞきドアに飛ぶ　世
思ひ出過ぎる誰彼のこと　生
さまざまの恋を見て来し月疲れ　世
静かにそよぐコスモスの原　生
カルヴァドスほのかに林檎香りして　世
見つむれば逃ぐ庭に来し栗鼠　生
旅仲間河童と賢治のことばかり　世
一揺れゆれて消ゆる蠟燭　生
降り立てば花の絨毯うつつなく　世
囀りを背にざる碁楽しむ　生

平成四年七月三日　起首
平成四年十月五日　満尾

初芝居

初芝居一声高く「大播磨」　中田あかり
きこしめしたる屠蘇の御機嫌　中川哲
桜貝寄せくる波とたはむれて　原田千町
脇目も振らず防風を摘む　杉江杉亭
卒業の子を見送りぬ織き月　岩井啓子
ペットショップの犬は熟睡　秋元正江
厄除の洗ひ地蔵の列長し　小野シズ子
ゑくぼでそれとわかる再会　ズ
ドアの鍵開けておくわと電話する　亭
億ション下がり万ションとなり　哲
雷もどこに落ちるか思案して　江
もみほぐしたる月の酸漿　町
本棚の鷗外全集並べ替へ　ズ
眼鏡はづして渋茶飲む人　江
実践す僻村塾の匠たち　哲
釉まで化学分折　町
花の奥壱越調の鐘ひそか　江
まだ抜けきらぬ春の鼻風邪

中田あかり　捌

ものうげな城のあるじに昏れおそく　子
　ヨーロッパいま国境は無し　町
卓囲み米をテーマにせめぎ合ひ　亭
　冗談話おちが肝要　哲
雪しまくふっと覗きしおしらさま　江
　襖の破れにおいらんの文　町
家元と牆をこえたる振付師　亭
　十円安い缶詰を買ふ　哲
健やかに双児ばあちゃんコマーシャル　ズ
　鳥居の陰におしっこの跡　哲
片割れの月を眺むる路次の裏　亭
　空室の窓忍草懸け　哲
逝く秋の杭州運河やや濁り　子
　ちちろ鳴いてる地下鉄の駅　江
夢ばかり描きたちまち時の過ぎ　町
　うすやき煎餅噛めばのどやか　同
遊ぶ子の青きシャベルに花の屑　哲
　山のあはひに鮎の放流　り

平成四年一月十五日　首尾子
於　深川芭蕉記念館

虹立つや

原田　千町　捌

虹立つや生まれる命ありにけり　原田千町
松のかざしとなれる凌霄　川島李花子
仕事部屋時計の塵を払ひゐて　西野みどり
少しはづませボールころがす　町子
芋煮会人の散りゆき月昇る　りり
石白々と色のなき風　町子
秋惜しむイヴ・モンタンの唄に酔ひ　町子
枡をはみだす原稿の文字　りり
週刊誌ない火焚きつけ燃え立たせ　町子
ゆふべベットでお隣の方　町子
エトルリア女神の像のたをやかな　りり
壺に描かれた鯨潮吹く　町子
月上弦狸も出でよ餌やらむ　りり
ゆっくりつかり少し湯あたり　町子
無重力漂ふごとく太極拳　りり
市街地の背に青き山容　町子
花の雨紅茶の味を楽しみて　町子
鶯の音にしばし聴き入る　りり

佛足石瑞祥七相弥生尽　町
　みやげにもらふ木彫の面　り
産直便高速道をぶっとばす　子
　焼酎飲んで二日寝つづけ　町
藪っ蚊のたっぷり吸った血が透けて　り
　外されてゐるCカップ・ブラ　子
わが妻をよそに咲かせて灯のうるむ　町
　狂ひ出したり猫にまたたび　り
おどろおどろ見せ物小屋の絵看板　子
　故郷の友好々爺然　町
読み返す仰臥漫録十三夜　り
　よくぞ食べたり御飯あんぱん　子
ニューヨーク同国人で群れたがり　町
　画廊の裏に積まるキャンバス　り
夢幻あとかたもなく消え失せぬ　子
　ひとり遊びの吹くしゃぼん玉　町
満開の花の並木の鋳師村　り
　瓢箪池に蝌蚪がいっぱい　子

平成四年八月十六・十七日　首尾
於　伊豆高原ホテル

肉饅頭

独吟　佛淵　健悟

肉饅頭ほっこり割るや冬の月
　敷松葉する庭のしづもり
初孫といろはかるたを賑やかに
　貰ふ玩具でぽっけ膨らむ
急坂を自転車押して登るなり
　軒すれすれに夏の燕
回教徒汗も拭はず祈るらん
　水飲み場にて指輪忘れる
新しい愛を欲しがる胸の奥
　コンピューターがはじく相性
学園祭重いテーマは嫌はれて
　漸寒の候手紙書く父
晧々と月は豚舎を照らすなり
　しらす台地は芋が適作
ハイウェイをとばして通ふゴルフ狂
　セブンイレブン熨斗袋買ふ
解散の噂まじりの花の風
　川向ふには野遊びの人

工房（ナオ）に仔猫抱き上げうつつなし
　立葵咲く昼のくらがり
戦車隊市民を見張り角々に
　こけた拍子に差し歯こぼれる
百八の鐘撞く番の百五番
　葛湯いただく時のぬくもり
わざをぎの口説く力の切なさよ
　演歌のやうな馬鹿になります
滑らかな牛窓湾に舟浮かび
　佳き水を売るビジネスもあり
名月の見え隠れしてわが庵に
　ふっと鳴き止む籠の鈴虫
林檎（ナウ）食む力士は碧い目の人で
　器用貧乏敵は作らず
ざっくりと開発進む裏の山
　大いなる鯉同朋で裂く
花の精追ひかけてゆく旅の宿
　春の炬燵で削る鉛筆

平成四年十一月十三日　起首
平成四年十一月十七日　満尾
於　新宿区西新宿「宿六」

初秋の　水鳥ますみ　捌

初秋の小さき島を巡りけり　水鳥　ますみ
月の傾く潮騒の海　真田　光子
実紫ひと枝膳に添へられて　倉本　路子
ファミコン遊び熱中の子ら　小林　千雪
つれづれに芸仕込みゐる猫ならん　村田　冨美
絵筵を展べ留守もたのしき　秋元　正江
咲きほこる南瓜の花の雄ばかり　路江
トラック野郎の粋なまなざし　江光
山坂を越えて漸くホテルまで　光雪
こんなところに古き教会　雪江
住みつきて納豆が好き歌舞伎好き　江美
井戸ポンプ守る下町の人　美同
たえだえに残る虫鳴く庭の月　同光
狐の提灯みえつかくれつ　光路
ピカソ・ミロ・ダリ・カザルスの国訪ね　路み
大きな指輪老斑の手に　み江
洛北の勅願寺なり花三分　江路
そぞろ歩きの惜春の詩　路

うらら(ナオ)かに筆のかげ置き書を習ふ　雪
放浪の末憩ふたましひ　美
鯉も乗せスペースシャトル・エンデバー　光
トランポリンにふはりふはりと　路
陶枕に夢のつづきを見失ひ　雪
くさかげろふの如き女なり　江
僕の熱伝へぬ君は絶縁体　路
双体神をまつる信濃路　光
痴呆症なってしまった方が勝　み
笛吹きケトル急になり出す　光
オアシスに宿る隊商月更けて　路
望郷つのるやや寒の肌　路
とら(ナウ)へてはまた放ちやる囮籠　光
宅急便はいつもお隣り　美
核家族漫画雑誌を廻し読み　雪
こけし並べる文机の上　路
金箔の吟醸酒くみ花の宴　光
盃流す遣水の苑　み

平成四年九月十六日　首尾　江
於　深川芭蕉記念館

梅の息吹

山口みづゑ　捌

千本の梅の息吹や曽我の里　山口みづゑ
温み初めたる谷戸のせせらぎ　梅田利子
春暖炉重き画集を取出して　峯田政志
バードカーブの屑をはらひぬ　坂本孝子
まんまるの月登り来る子守歌　市野沢弘子
小牡鹿の声草にかそけく　志
濁酒（ウ）コップかちりと同期会　利
潤む瞳にまたもふらふら　志
墨染を紬に変へて通ふ路地　孝
鱧に刃を立て割ける引売　同
ほころびし寝莫蓙なじみて宵の月　利
旅の支度はいつも身がるに　利
神在ますアルベールビル四方の峰　弘
コマーシャルにも出でし雪女郎　利
冬苺手土産にして上り込む　孝
悪事千里を走る町内　同
海の声聞かんと海へ花の枝　弘
さんだらぼっち送る捨雛　同
　　利

雲雀（ナオ）東風転勤の報突然に　孝
運鈍根の運向いて来る　利
投げられし賽すっぽりと壷の中　孝
緋牡丹お竜湯文字まぶしき　利
罰いちはほれた男の勲章さ　孝
エレベーターに落す咳　弘
木の葉舞ふ西新宿の甃　志
税理士稼業接待に慣れ　ゑ
カラオケに老いの名残を夜明けまで　志
陸軍少尉月の墓標は　孝
秋扇七言絶句のかすれゐて　利
茜とんぼに指かませをり　弘
かたまりつ散りつ子等行く刈田道（ナウ）　志
無投票にて決まる村長　弘
嫌煙は環境保護の旗印　孝
のっぺら凧の糸の切れたる　弘
呉服屋に紋帳を繰る花の昼　ゑ
夕べ長閑に句座の賑はひ　志

平成四年二月十九日　首尾
於　俳句文学館

さみどりの

山崎　一恵　捌

さみどりの山懐や日雀鳴く　山崎一恵
句座和やかに夏きざす宿　瀧川雅代
レース編み揺り椅子ゆらす人のゐて　下坂元子
そっぽ向いてる僕のむく犬　八角澄子
繊月をめでて佇む橋の上　梅田利子
稽古帰りの謡さわやか　利
太閤忌有馬の里の野点傘　代
青い目の娘に着せる振袖　元
引き寄せてキスのノウハウ教へ込み　利
マスコミ塾は煙草濛々　澄
縄のれん撥ねて兄いはずいと入り　元
じろりと睨む番台の婆　利
雪中の田圃初肥運ぶ月　澄
ペタンシップは風邪の妙薬　代
代議士のハスキーボイス生まれつき　利
分校先生いまも温和で　代
夢に咲く石割桜花盛り　元
風と遊べるばらもんの凧　澄

浅蜊採りをり空に身を伸ばし　代
　ほまち無尽は何に使ほか　利
磨きたて新車ならべし展示場　元
　チェーンスパナがにぶく光りて　澄
堪忍の緒のふっつりと祭笛　元
　旗ひらめかせ氷菓子売り　利
語尾あげて故郷の訛りもおほどかに　代
　幼なじみのアイシャドウ濃く　代
妻なればおどろの過去を隠しぬき　元
　一すじ道に残る昼月　澄
早稲酒を提げて碁仇おとづれぬ　代
　ふくべに画きし孫のいたづら　元
せっかちの掛け声ばかり冬仕度　澄
　ホームラン出てベンチ沸騰　利
腹の虫催促してるお弁当　元
　舟べりたたく鯛の乗込み　代
花霞見えがくれせし角櫓　利
　Vサインして写るうららか　恵

平成四年五月十三日　起首
　　十四日　満尾
於　谷川温泉

二十韻

躁鬱

躁鬱の今宵も鬱のビール哉　東　明雅

窓を蓋うて咲ける紫陽花　片山多迦夫

領事館執務の人もひそやかに　雅

見覚えのある髭の肖像　迦

文音

ロザリオの月の半島ひとり旅　雅

マグマ噴き噴く山の冷まじ　迦

菊枕女の恨み綿々と　雅

和事師ありき翫雀といふ　迦

大阪の浮世小路に住み馴れて　雅

戎さんでも勝てぬ不景気　迦

初場所といふに横綱総崩れ　同
君が代聞くも久しぶり也　雅
日の丸の意匠抜群万国旗　迦
海は紺碧コスタデルソル　雅
ジャスミンの香にあがりたる蛾眉を愛で　迦
※所歓校書の肌の潔さよ　雅

樓蘭の木乃伊に幾世流れけむ　迦
鳥獣虫魚春惜しむらん　雅
花の下詩画のともがら屯して　迦
古式ゆかしき曲水の宴　雅

平成四年十一月十一日　満尾

※お気に入りの芸伎

秋時雨

秋元　正江　捌

秋時雨わかものの街迷ひこむ　　秋元正江

薄と月の衣飾る店　　佐藤良弥

やまどりを提げてくるひと牧閉ぢて　　高橋豊美

移動電話で会の報せを　　八代良子

海嘯（ウ）の近づく床に横ずはり　　美

衿足の香のふっと漂ひ　　子

あぶな絵で評価きまるか浮世絵師　　弥

赤と青とが重なってゐる　　子

カクテルを置かないバーで冷酒酌み　　美

陶の狸にパラソルを挿す　　子

どこ迄(ナオ)も階つづく那智大社　同

快気祝ひの老いちちの歩よ　江

ふたりゐる古き写真をそっと見ぬ　弥

ゆたんぽ要らぬ君の体温　子

冬の月自転車で肉運ぶらん　美

均等法はバイトにもあり　子

船(ナウ)出して過ぎし半生かへりみず　弥

春場所桟敷増える外人　子

花の山西郷像を包み込み　弥

浅蜊炊き込みよくひかる飯　美

平成四年十月二十六日　首尾

於　水交社

河骨

穴澤篤子

木の橋の歩や河骨を吹ける風

みんみん蝉の鳴きはじむ頃

古川砂洲男

遠き塔校長室の玻璃越しに　子

問はず語りの名所案内　男

文音

月明のあをさに馬の嘶(ウ)ける　子

世渡り下手の夫は栗剥く　男

初恋の彼はバブルの泡の秋　子

厠の灯火(あかり)消し忘れたる　男

病棟の長き廊下の砂だらけ　子

子供自転車今日も置き去り　男

連(ナオ)れ立ちて訪ねし古城山の上　同
生きて影もち寒さ歩ける　子
雪を見て一盃月を見て二盃　男
ところかまはず写真撮る人　子
好ちゃんも白髪となりしクラス会　男
このときめきにすこしあわてて　子

娘(ナウ)留守ピアノのキーを軽くうつ　男
誘はれ声は庭の鶯　子
花の山薄眼あけたる羅漢さま　男
海市に棲むと行ってしまひし　子

平成四年六月五日　起首
平成四年十一月二十八日　満尾

青き踏む

市野沢弘子　捌

沼よりの声さまざまや青き踏む　市野沢　弘子

遠く近くに睦む春禽　滝川　雅代

せがまれて絵凧教室開くらん　豊田　好敏

販売機よりミルクコーヒー　八角　澄子

ゲ（ウ）レンデのシュプール照らす月円く　篠原　達子

彼と揃ひに編みし手袋　村田　冨美

何事もわたし無しでは駄目なひと　代

お帰りチャイム歌ふむく犬　達

遊泳の果ての飛行士泣き笑ひ　澄

鯖の押し鮨俺の好物　敏

夏霧（ナオ）の籠めて赤穂の城の趾　代

清十郎の墓もある寺　澄

嫋々と口説きのあとは責め通し　代

ぞろぞろ産ます似たる鬼の子　敏

後の月山里は皆寝しづまり　澄

マッシュルームの出荷手伝ふ　美

ファックス（ナウ）にやうやく慣れし姉妹　達

胃は重くても酒は別もの　敏

はるばると集ひて喜寿の花の宴　弘

とばす風船仰ぎうららか　美

平成四年三月二十九日　首尾

於　手賀沼フィッシングセンター

七五三

稲葉　道子　捌

ぽっくりや鈴音ひびく七五三　稲葉道子

紅葉散り初む瑞垣の内　若尾よしえ

つやつやと鯉の甘露煮あがりて　小野シズ

缶コーヒーでほっとひと息　町田順風

句を詠まぬ人はカメラを月に向け　え

露けき縁に肩を寄せ合ふ　ズ

好きなもの相撲に落語・酒・麻雀　風

疑惑に満ちた派閥の政治　え

ノラ猫と烏の集ふ銀座路地　風

宝ジェンヌを追ひかける娘ら　同

心太（ナオ）酢が利きすぎて鼻へ抜け　ズ

御柱立つ森に夕月　風

高速道地下より縄文土器埴輪　え

新館長の身につきし彼　同

キス現場撮られてなほもシラを切り　風

恋の遍歴重ねたる過去　ズ

渓（ナウ）流のせせらぎ清き山の寺　え

夢のごと舞ふ雪虫の群　子

待ちかねし花の盛りをバスの旅　ズ

保健所で待つ長閑なる午後　え

平成四年十一月十五日　首尾

於　梅ケ丘地区会館

繭　玉

内田　麻子　捌

繭玉の揺れ愉しめる立居かな　山口　みづゑ

読初とする勅選集歌　高瀬　美保

雪山の高きに雲の集ひ来て　岩田　玲子

村の林をよぎる鳥影　内田　麻子

観音堂閉ざす扉に月射しぬ　森本　郁子

巴里土産のマロングラッセ　麻

ひょっとしてもしやもしやの青蜜柑　保

不意に子供に見える男性　玲

倒れても手を振って立つブッシュさん　麻

豚をおだてるのは難しい　玲

夏（ナオ）の潮真珠を丸く育てつつ　郁

おしきせ麦酒いつか小瓶に　ゑ

大仰にタレント誉むる旅の味　郁

妄と言ふ字なぜ女なの　保

七つ下りの雨の濡れ場の髯漢　玲

ととらくかからく共にホームに　ゑ

望（ナウ）の月弥生狂言観て帰る　保

春のショールの目立つ地下鉄　ゑ

たわみつつ川面に映る花錦　麻

市で掘り出す古伊万里の鉢　郁

平成四年一月二十三日　首尾

於　梶が谷房連庵

柚子の軒

もの学ぶひとの集り柚子の軒　田中弘子

夕月かかる遠き山脈　小園好

菊人形化粧まはしも輝きて　加藤治子

するりと解けしマジシャンの紐　大谷規美子

大谷規美子　捌

声便り元気確かむ姉妹　月山冨佐子

香水の壜筐ぞこに秘め　規

彼のこと日記にしるす頭文字　好

ジンタ淋しく歌ふ黄昏　佐

学歴をいつはる議員神の留守　弘

噂々に塞ぐ北窓　規

節穴(ナオ)を通り鼠が行き来する　好

猫ふんじゃった三味線(しゃみ)ふんじゃった　同

裏町に待つ身はつらし陰の女　治

ドラマティックにこの夏の恋　同

月待てば麦酒の泡の消えかけて　規

癌が苦になり命絶つ友　佐

故郷(ナウ)は昔の儘の鳥の声　佐

春のベンチに忘れ手袋　弘

さまざまに取り合はす帯花衣　好

風の向くままとばす風船　規

平成四年十月二十日　首尾

於　猿投台公民館　佐

後南朝

杉の間の桜や遠き後南朝　坂本孝子

摘草の籠おろす道端　大窪瑞枝

弥生尽金魚の糶は符丁にて　子

太き指もて叩く電卓　枝

勝相撲（ウ）いなせに帰る宵の月　子

一文字文庫秋の袷に　枝

お見合ひをまた断ってそぞろ寒　子

男ばかりの部下に囲まれ　枝

アテンションエアーポートに掏摸侵入　子

みばえの付きしメロン匂へる　枝

両吟

風紋（ナオ）の砂丘涼しく月さしぬ　同

少年のみる夢は危ふき　子

学閥を得て閨閥に挑みけり　枝

口止め料に抱きし奥様　子

仮綴じの頁ゆるみしヴェルレーヌ　枝

丸木小屋にも聖夜めぐり来　子

猟（ナウ）犬のねむれる炉辺に銃磨く　枝

人生長し酒は友達　子

花影をゆるゆる押せり車椅子　枝

群れ鳥のきてこぼす囀り　子

平成四年四月二十三日　首尾

於　新幹線車中

冬に入る

小野シズ

日ごよみを一枚めくり冬に入る　小野シズ

去年のごとくに炉を開くなり　東明雅

はでな服着てスキップをするならん　桑原美津

青薄ゆれ庭の広々　佐藤良弥

捌

河童忌の河童が覗く窓の月　雅

新派の濡場いつか握る手　津

ロゼワイン酔へば酔ふ程せつなくて　弥

連勝単勝はづれ券舞ふ　ズ

大統領四十六で当選し　弥

ラビリンスの夢出口なかなか　津

石仏（ナオ）に紛れて佇てば木の実降る　同

奈良の社は角切の時　雅

月の下フルートの音の喨々と　津

十円で済む愛の告白　弥

老らくの恋おしろいで皺埋め　津

同病同志山の温泉　雅

信州（ナウ）の名物馬刺煮込蕎麦　弥

蜥蜴と共に穴を出る我　雅

花疲れ空返事してうとうとと　弥

ボートレースの太鼓とどろく　雅

平成四年十一月八日　首尾

於　光ケ丘近隣センター

月山

加藤　治子　捌

月山や色付き初めし草紅葉　加藤治子

鈴の音はづみ空に爽やか　大谷規美子

十三夜石臼の箍引きしめて　月山壹

夕刊持ちくる孫のお河童　美

好評(ウ)のテレビドラマが終結す　同

私の不倫噂ひろまる　治

長旅に孤閨の妻は何の夢　壹

炬燵はなれず留守番電話　治

雪をんな優しく雨戸叩きゐて　美

どんと一発種ケ島鳴る　壹

友（ナオ）と酌む「とろり」の口に滑らかに　治

ブラックホールの果てしなき底　美

手を取りてシルクロードを逃避行　治

吸血鬼にも恋さるる女　美

月涼し書家の訪ねる和紙の里　同

滝の不動の衣苔むす　治

水中（ナウ）り陀羅尼（あた）を服んで間にあはせ　壹

児の歓声に揺らすふらここ　治

花吹雪単線列車の風に舞ひ　美

草餅食べて帰る連衆　壹

平成四年九月二十一日　首尾

於　上越新幹線車中

月の海

加藤　道子　捌

月の海潮引く跡や不如帰の碑　加藤　道子

河口に舫ふ鯊の釣り船　本田　八重子

新米を火加減うまく炊きあげて　岩垂　景翠

玄関脇に置きし回覧　橋野　代代子

近頃はブリッジ囲碁のまた流行り　松田　多恵子

優しい声の電話気になる　翠

興信の調査いちいち立つ柳眉　代

大風吹いてのちの静けさ　八

炬燵板酒と肴はそのままに　翠

狸親子に餌つけ成功　代

源氏名で呼んで下さい今日からは　多
遊び遊ばれみな藪の中　道
ドンと知事辞表を運ぶ飛脚便　翠
お化け出さうな夕立の寺　多
夜濯ぎの竿に干されて月の下　同
山見ゆる里読書三昧　八

老いてなほ褒貶の世にかかづらふ　翠
亀の鳴くなり神苑の奥　代
花冷のコーヒーを飲む紙コップ　八
春の苺の出荷始まる　多

平成四年八月二日　首尾
於　鎌倉中央公民館

萩の露

神谷　安子　捌

暁の光りの珠や萩の露　神谷　安子

垣を鳴らせる風に繊月　副島　久美子

江鮭うねり串打ち焼くならん　下坂　元子

国語工作宿題の児ら　篠原　達子

忘れずに旅の用意の時刻表　桑原　美津

礼文島にて妻とぱったり　久

マニキュアの色新しく艶めきて　元

エイトビートに軋む木の床　同

焼酎を一気に呷り験直し　久

公衆電話蚊にさされつつ　美

遊園地（ナオ）ディズニーファミリー勢揃ひ　達

子泣き爺に似てる政治家　久

凍る月手を掛け覗く井戸の縁　達

羽織滑らせ畳算する　元

その昔洋妾（ラシャメン）今はビルオーナー　美

新興宗教いつか立消え　達

名（ナウ）を呼べば白内障の犬寄りく　安

バイク片よせ拭ふ春泥　元

石割りの花爛漫と市庁前　美

連句を巻いてあそぶ清明　達

平成四年十月六日　首尾

於　池袋談話室

新　樹

木場田文夫　捌

舗道行く目に一列の新樹かな　木場田　文夫

ビル街抜ける風の涼しさ　若松　隆一

大振りの帆船模型玻璃棚に　佛渕　健悟

煙草ゆったり原稿の前　夫

昼の月思ひ巡らす控訴審　一

野分の寺にふたり抱き合ふ　悟

外つ国の妻を迎へるぬくめ酒　夫

攘夷々々で郷士眠らず　一

暗箱にパッパッパッとエレキテル　悟

学園祭のバザー焼きそば　夫

凍(ナオ)て土に膝擦りむいて空の青　一

どもり直らぬ能登の新発意　悟

ＡＶ嬢Ｖサインして消えにけり　夫

２Ｋマンションシェルターに似て　一

心太ぐるぐる掻けば月笑ひ　悟

鵜匠たくみに綱を引き寄せ　夫

農(ナウ)協も横文字使ふ世となりぬ　悟

新入生の敬語おもはゆ　夫

花屑をホースで洗ふダビデ像　一

尺八を吹く春の縁側　悟

平成四年五月十四日　首尾

於　二子橋「幸林」

秋の蚊

倉本　路子　捌

ヘルン旧居秋の蚊打ちつ巡りけり　倉本路子

今宵の月へひびく下駄の音　秋元正江

ななかまど瑠璃くれなゐをこぼすらん　真田光子

山村留学はしゃぐ子供ら　水鳥ますみ

タンデムの颯爽と橋渡りゆく　村田冨美

ペアールックにちょっと照れつつ　小林千雪

閻魔様不倫も不義もでき心　江

小町通りのふかし饅頭　み

猫抱いて小火でありしをぼやく人　光

作家気どりの懐手して　美

巴里（ナオ）から倫敦へまた舞ひ戻り　雪

極道通さぬ空港もある　路

またの世もあなた一途につくします　み

さしつさされつびいどろの月　光

籐枕来し方の夢封じたる　江

アラーの神よ御心のまま　美

電卓（ナウ）の弾き出したる億・兆・京　雪

鮎挿す湖に迫るたそがれ　光

花の輪になつかしき歌湧き上り　み

幟はためく弥生狂言　美

平成四年九月七日　首尾

於　熱海パサニア・クラブ

一行の

桑原　美津　捌

一行の秋思吹かるる告知板　柴崎　美恵子

列車の風にゆれるコスモス　柴崎　正寿郎

稲架の月竹馬の友と酒酌みて　桑原　正敬

おしんこの味ちょっと辛口　桑原　美津

ふるさとに季節はづれの墓詣り　恵

朝日に消える庭の初霜　正

息白し犬にことよせ声かける　敬

恋の合図と聞くセレナーデ　津

カーテンを替へて明るき芽木の窓　正

鳥がつつきし春眠の夢　恵

知恵詣口をむすびし子の真顔　敬

角倉了以坐する嵐山　津

川下り握りし手と手そのままに　正

熟年夫婦の歩みゆるやか　恵

ロンドン塔ま近き窓に仰ぐ月　津

お茶の時間は相撲あれこれ　敬

秋深し街頭テレビに集ふ人　正

旅の土産を選ぶ夕暮　恵

大太鼓鬼面の躍る花篝　敬

蛤沈む金泥の椀　津

平成四年十月十五日　起首

平成四年十一月二十九日　満尾

障子貼る

上月　淳子　捌

山の湯の貼りしばかりの障子かな　上月淳子
芋名月に集ふ広縁　滝川雅代
国体の準備万端整ひて　長崎和代
目を輝かせ覗く幼な等　須田智恵

片方（ウ）の靴をたよりの嫁探し　和
ちょっと手強い年上が好き　恵
ＰＫＯ出て行く船にテープ投げ　和
厚切ステーキ胡椒たっぷり　雅
痛風の疼きに堪へて冬籠　梅田利子
年末賞与へりし切なさ　雅

浅(ナオ)草寺善男善女きりもなく　利

江戸から続く角の古着屋　和

刻永久に止まれと彼に抱かれ居り　恵

知らぬ名前の腕の入墨　利

蜘蛛の囲のななめにかかる月の面　恵

冷酒の酔過ぎし日の夢　淳

詩(ナウ)聖杜甫李白も詠みし湖はるか　雅

古城の上を帰りゆく鶴　同

十重二十重パフォーマンスの花の下　利

眠気をさそふ長閑なる昼　和

平成四年十月六日　首尾

於　池袋たきざわ

きのこ飯

後藤志津枝　捌

きのこ飯炊くまも揺るる船厨　繁原敏女

赤絵大皿照らす月光　後藤志津枝

夜長人筆紙硯墨買ひこみて　月山壹

街道めぐりに万歩計もち　岡本道子

森洗ふ土砂降り雨のひとしきり　三岡鐄次

あの人ともう切れる算段　矢崎藍

もたもたと醜女の恋は深情　女

社の庭に焚火燃え立つ　中澤すが

大嘘のとびだしさうなくしゃみする　壹

急ぎでもない速達がくる　藍

休日(ナオ)のはたきぽんぽんリズムあり　が

新発意修業これで三年　藍

目くばせに心とらはれあらあらら　が

宇宙空間キスが炸裂　藍

夏の月吾輩は猫読みかへす　子

広瀬の簗の鮎が小さい　次

はり合(ナウ)ってここまで生きた老姉妹　枝

凧合戦に眼ほそむる　が

祝茶の花一輪にこもる幸　壹

籠の中なる鶯の声　次

平成四年十月二十日　首尾

於　猿投台公民館

秋の風

小林　千雪　捌

初島へ航跡白し秋の風　小林千雪

はやも着きたる観月の客　倉本路子

今年酒出来上々とふるまひて　水鳥ますみ

移動電話のベルの鳴り出す　秋元正江

旅鞄(ウ)かかへし少女無口なる　真田光子

修司の詩(うた)を教へたる彼　村田冨美

有り金が穴場ねらひでパーとなり　み

半迦思惟像謎の微笑　江

雪の夜の婆のかたれる国訛　路

鯛焼の尾の餡が大好き　光

菟(ナオ)めゐる子のバーコード知らず捨つ　美

二世代住宅玄関は別　江

平成の〝武蔵野夫人〟と噂され　美

抱かれて熱き羅の胸　光

夏風邪の漸く癒えし月の弓　み

後悔なしと突張ってきし　同

お歴(ナウ)々狐と狸の化かしあひ　路

富士の裾野は遠くひろびろ　み

神苑を埋める花びら踏みてゆく　美

囀りを聴く毛氈の上　光

平成四年九月七日　首尾

於　熱海パサニア・クラブ

葡萄一顆

五味　蓉子　捌

陽に透きて葡萄一顆の世界あり　五味蓉子

爪あとの如残る繊月　内田麻子

野山駆け蜂の仔取りに遊ぶらむ　高瀬美保

サラリーマンの遅寝早飯　蓉

そつは無し立派立派とほめごろし　保

止められなくて美容体操　麻

五年振り会って忽ち燃え上る　保

喜和子が死んで泣くは幾人　麻

冬鷗飛び立ち無音の浜続く　蓉

褞袍の柄は黒の棒縞　麻

太(ナオ)ぶととバリトン響くリゴレット　保

キャビアを値切るモスクワの市　蓉

しゃっくりが何のはづみか不意に出て　保

世話女房の口移し酒　蓉

月浴びてヨナグニサンの羽化の時　保

岩煙草咲く小さきむらさき　麻

株(ナウ)券の下がり戸建ての夢が消え　蓉

衿かき合はす比良の八講　麻

遠き花近き花見ゆ観覧車　保

若駒跳ねて牧はうららか　麻

平成四年十月二十二日　首尾

於　房連庵

秋日落つ

近藤　守男　捌

サヨナラの球場の森秋日落つ　近藤守男

月見酒得て急ぐ若き等　佛渕健悟

部屋々々の書架の書もみな冷ややかに　男

携帯電話更に小さく　悟

まなざし（ウ）の熱く注げる新車ショー　男

コンパニオンはハイレグの美女　悟

離れ家にしのびて待てば湯の香　男

政界浄化いづれやります　悟

禊する社の杜に夏の鹿　男

蚊取線香継ぎたせる婆　悟

新米（ナオ）の刑事は辞書と首っぴき　同

靴音響く高塀の道　男

行く年を病みて見送ることに慣れ　悟

月と凍鶴パステルで描く　男

愛らしき高校生が又覗き　悟

犬に引かせて公園の恋　男

口（ナウ）ずさむ唄と消えたる夢の数　悟

午後の光に紫煙漂ふ　男

オホーツクの海見に来よと花便り　悟

菓子をぽっけに野遊びの子ら　男

平成四年十月十七日　首尾

於　牛込北町

夏霞

雑賀　遊　捌

夏霞かかれる川を渡りけり　雑賀　遊

乾きし土堤に咲ける草合歓　下坂元子

図書室の窓のカーテン開かれて　滝川雅代

踏み台に乗りかけ直す額　神谷安子

抱きあげた子が指させる淡き月　代

踊浴衣のお揃ひの柄　元

デート終へ精霊蜻蛉見つめ居り　安

スクリュウキャップワイン手軽に　遊

五輪旗の前に歌声湧き起こり　元

衛星受信やっと付きたる　安

月覗(ナオ)く鯛焼食らふ髭男　元

悲喜交々の年も終りぬ　安

抱きしめて殺し文句にそら涙　代

それにつけてもキスの濃やか　同

夜荷解屋(よにげや)の塩辛声を張上げて　安

私の顰蹙買って頂戴　遊

城(ナウ)下町紅殻格子犬矢来　同

昔見し雉夢に現れ　元

弥撒済みて神父の肩に花吹雪　安

春泥をつけ戻り来し靴　代

平成四年七月二十九日　首尾

於　源心庵

あぢさゐの房

坂本孝子

雲密(ウ)にあぢさゐの房ふくらます
水輪描きてすいとあめんぼ

米谷貞子

絵日記の楽しき夏も過ぐるらん
細めしガスにジャムを煮てをり

孝
貞

文音

桂男にトランペットを聞かせばや
秋の渚の貝は星屑

孝
貞

逢ひに来る髪冷ややかに香はしく
高野聖の負へる煩悩

孝
貞

古文書を下貼りにして小間の壁
手燭ほのかに和む夜咄

孝
貞

大嘘(ナオ)して膝の猫おどろかす　同

次期総裁の吾も候補者　孝

何事もプロンプターの言ひなりに　貞

燃ゆるベーゼはコニャックのせい　孝

月皓々砂漠の蠍尾をもたげ　貞

背ナの刺青にしのび寄る老　孝

お向(ナウ)ひと隣に頼むボランティア　貞

鷹もしばらく鳩になるらし　孝

姿見に映す御所解花衣　貞

八坂へまゐる春宵の影　孝

平成四年六月十八日　起首

平成四年八月十二日　満尾

糸瓜

佐古　英子　捌

ぶら下る外に能なき糸瓜かな　東　明雅

雲居に透くる肌寒の月　佐古　英子

鰹節子（からすみ）とバカラの杯でもてなして　松本　碧

ＣＭ見てははしゃぐ幼児　豊田　好敏

不況風（ウ）くるま家電に銀行に　青木　秀樹

蟻地獄にも似たるわが恋　雅

その時は羽化登仙の心持ち　樹

霊験多き熊野権現　碧

初老なる火の番小屋の股火鉢　敏

鷹を放ってまづは一服　樹

NY（ナオ）線ビジネスクラスときめてゐる　碧

ちょっと気障なるここのソムリエ　雅

死の床ではじめて明かす芸者の名　子

よき夢くれた君が最高　敏

アカシアの大連港に昇る月　樹

中国料理またも出る豚　雅

北杜夫（ナウ）・遠藤周作・阿川さん　碧

人の躁鬱山笑ふなり　樹

花の下安良居祭練り歩く　敏

笠をかむった浜焼の鯛　子

平成四年十月十五日　首尾

於　電通築地南寮

セルの袴

式田　和子　捌

弊衣破帽セルの袴のなつかしき　式田和子

ことこと煮上ぐ家の伽羅蕗　鈴木喜久

園児らのすきっぷしつつやってきて　万波鮎

左ハンドルちょっと危い　渋谷千鶴子

三日月（ウ）も刃のごとく凍ててをり　久

八目鰻を買ひに巣鴨へ　千

この恋はすれ違ひざま始まった　鮎

デイトリッヒの腸（ひかがみ）にキス　同

鎧戸の窓閉め切ってレンガ館　久

泣虫弱虫放屁（へこき）虫無視　三浦悟朗

人形（ナオ）を乗せて施餓鬼の舟を押し　千

群青のなかぽっかりと月　鮎

長老が乾杯音頭初優勝　朗

量る体重少なめに言ふ　久

鳶職に惚れてサウナで待ち伏せし　朗

雷が落ちても放すもんかと　千

吉（ナウ）とでてそれからの日々運もなく　鮎

焼蛤をなりはひとする　久

フレームをはみだすほどの花大樹　渋谷光一郎

ニイハオ・サワディ平和なる春　朗

平成四年五月二十五日　首尾

於　桃径庵

更衣

亀戸や天神様も更衣　下坂元子

新樹のかげを映す池の面　瀧川雅代

高校生混声合唱たのしげに　百武冬乃

ばっちりきめるカメラアングル　神谷安子

月のぼり深夜バスつくころならん　篠原達子

柚餅子すすむる指の白さよ　代

諸鶉着やせの肩を抱き寄せ　乃

テリヤ甘えてまつはってくる　元

知事選挙出るのやめるの摩訶不思議　乃

脳の片隅羅針盤あり　安

篠原　達子　捌

凩(ナオ)に胆石三つ持ちあるく　達

冬至こんにゃく茹で上がる月　代

ふるさとの夢語らひて酌み交はし　安

チャドルを脱げばうら若き女　乃

悦楽の果てにハバナの香の籠り　元

鴎外の忌に仰ぐ山脈　同

構(ナウ)へたる弓射る人の心技体　安

働き蜂のうごきせはしき　代

美術館落成祝ふ花の昼　達

乳母車押すかげろふの径　乃

平成四年五月二十六日　首尾

於　源心庵

半夏生

繁原　敏女　捌

友訪へば木蔭に白き半夏生　伊藤せき

綾の汲みあとさらり夕凪　長田房子

バースデー年の数だけ灯を立てて　繁原敏女

安楽椅子にゆれる嬰児　由川慶子

月を待ち賑はふ厨煮ころがし　き

しめし合はせる背戸の柿畑　女

恋は吉小式部の枝にきつく結ひ　慶

異国の空に帰りたがる娘　房

僻地でもノーと言へない宮仕へ　き

ばさり切らるる厚き紙束　慶

点鬼簿（ナオ）に我名を探す冬の月　同

葬頭河婆よお手やはらかに　き

アマリリス永いキッスにあてられる　房

愛は盲目定年もなし　き

妻と子が無事を祈れる宇宙船　同

正常心はFぶんのいち　女

白塗（ナウ）のピエロ泣くのか笑ふのか　慶

鐘のおぼろにそぞろ歩かむ　房

信濃路は桃と桜と花見酒　き

蛙の声の遠く近くに　女

平成四年七月二十三日　首尾

於　伊藤せき宅

大暑

下坂元子　捌

黒犬の舌吐きてをる大暑かな　下坂元子

音色かそけき鉄の風鈴　雑賀遊

撮りためし山岳写真拡ぐらん　佛渕健悟

エスプレッソで淹れし珈琲　中川哲

待ち合はすコーンコースに仰ぐ月　豊田好敏

星飛ぶたびに交すくちづけ　同

障子貼る女は金沢生れにて　哲

小さき祠を祀る裏庭　遊

震度三津波警報見るＴＶ　敏

クラスメイトが当確となる　遊

数(ナオ)へ日の質屋の軒の積布団　同

繊月あげて細雪やみ　哲

ソムリエの粋と気障とのいい間合　遊

あんな顔して手が早いのよ　哲

危な絵の晴雨の棲みし路地といふ　敏

バギーに眠る嬰のすやすや　遊

潑(ナウ)剌とオリンピックの選手団　子

菠薐草を皿にたっぷり　哲

鳶の声ひょろろとひびく花館　遊

鯉をからかふだんだらの蝶　敏

平成四年七月二十七日　首尾

於　桃径庵

秋深む

杉江　杉亭　捌

秋深む越路へ向かふ門出かな　杉江杉亭

色なき風の渡る鉄橋　式田和子

操舵室七日の月を眺むらん　中川　哲

缶珈琲を傍らに置き　上月淳子

唱名（ウ）は「のうまくさんまん」不動尊　豊田好敏

剃り跡青き杜氏倉入り　亭

初場所後所帯持つ娘はまだ十九　和

BSテレビやっと新調　哲

うじ素性にゃあと雉猫欠伸する　淳

しっかりせいよ地震予知連　敏

白玉(ナオ)を月に見立てて茹小豆　同

フィヨルドの滝こひし故郷　淳

縄文の甕がファッションインテリア　哲

閉じ込められし雪鬼が哭く　和

しがらみのあればいや増す燃ゆる恋　亭

睦みしあとに計る血沈　敏

微醺(ナウ)帯ぶ謡の声の通り過ぎ　淳

畑打つ人の鍬を洗ひて　亭

老いぬれば花の浄土を願ふなり　和

弥生野狭し子等とかけっこ　哲

平成四年十月二十八日　首尾

於　金沢行き車中にて

風鈴

杉山　壽子　捌

風鈴は風の便りを待つならん　青柳栄昌

初夏の香りの漂へる軒　杉山壽子

童たちお絵画きごっこ楽しみて　木村悦子

母は手まめにお菓子焼くなり　小塚淑子

薄月夜（ウ）ときに聞こえる弥撒の歌　宮川侊子

コスモス原をゆらす仲よし　田々宮芳侊

秋の果て恋文らしき結び文

株の上げ下げ一喜一憂　侊

眠たくてちょっと休憩したいだけ　淑

旅は道連れスペインの町　丹下敬子

朱（ナオ）の色にとび来る牛の息白く　敬

どきどきはらはら凍月の下　吉川嘉次郎左衛門

縁先で間抜け顔した角の帯　昌

褄とる魔女のわなにかかりし　くのあや

定年後たった四年のじじむささ　細川研三

新議員さん嘘がすぐばれ　や

高（ナウ）速路古地図にありし家もなく　門

雛の市にて郷土雛買ふ　三

石仏もほどよく酔はす花の昼　芳

囀りの中届く弁当　三

平成四年十月二十日　首尾

於　木村悦子宅

立秋

立秋のあらたまりたる園生かな　須田智恵

えびこほろぎの跳べる踏石　百武冬乃

後の月カーテン開き眺むらん　梅田利子

しみじみと聞くフルートの曲　篠原達子

手土産のみちのくの酒酌み交し　長崎和代

とはずがたりに愛の遍歴　利

匂ひ立つ熱き乳房の我ながら　乃

薄墨色に昏るる山の端　代

社殿より灯ともす春日万燈籠　利

蕎麦を啜れば霰たばしる　達

須田智恵捌

おいお前金利下ると鼻目鏡　同

カルチャーセンター止めないといふ　代

ハワイから聟が来てより英語づき　乃

愛が一杯避暑地ＤＩＮＫＳ　同

舞踏会白々明くる夏の月　達

埴輪の馬の嘶いてをり　代

寺町に古着ひさぎて五十年　達

春泥つけて帰る子ども等　恵

退院の朗報届く花の昼　代

智恵の輪ぽんと抜けるのどけさ　利

平成四年八月二十六日　首尾

於　源心庵

一葉忌

副島久美子　捌

月の出の気になる今宵一葉忌　副島久美子

八つ手咲きをり白のかそけさ　下坂元子

設計図間取りさまざま描くならん　滝川雅代

サ行の順にポトフ味付け　梅田利子

ウ

またできるゲームセンター学生街　篠原達子

相乗り自転車さっと過ぎ去る　山崎一恵

片蔭でつま先立ちの彼女抱き　代

登山帽脱ぎ仰ぐ穂高嶺　元

突然に馬驚かす発破音　代

注連風に揺れ小さき御社　恵

土俵（ナオ）への夢たち切れず角界へ　利

するめ噛ってくるま座に月　同

初潮に艫綱を解くベイサイド　達

カリブのレゲエ胸も豊かに　元

うつり香に恋の炎のいや増しぬ　恵

絵皿時計のいつか止まりし　達

宇宙（ナウ）基地レゴ組み合はせ遊ぶ子等　元

立春大吉婆の退院　達

しっとりと雨に色濃き花の枝　代

巣立鳥来し丘の和草　恵

平成四年十一月二十五日　首尾

於　源心庵

野分雲

瀧川雅代

羽づくろふ檻の孔雀や野分雲　瀧川雅代

欅の梢に覗く昼月　篠原達子

美術展搬入準備念入りに　雑賀遊

膝を揃へて間食（おやつ）待つ児ら　長崎和代

瀧川雅代抄

笑顔（ウ）もて家事協力を迫らるる　和

犬の散歩にかこつけて逢ふ　遊

プラチナの婚約リング赤い石　同

コスタデルソル真っ青な海　子

暑気払ひ少しの酒がすぐまはり　和

水虫をかく失脚の知事　子

剥(ナオ)落の風神雷神雨の中　和

栄養豊富モロヘイヤ買ひ　遊

むっちりとチャイナドレスにくねる腰　雅

狸御殿の今宵嫁取り　子

月明りあまねく照らす枯山河　和

父の遺せしパイプ愛用　遊

連(ナウ)弾のピアノ時々リズムずれ　和

お玉杓子に手足生えだす　子

花びらの散り込む車庫の三輪車　遊

アルバム開きのどかなる縁　和

平成四年九月三十日　首尾

於　源心庵

額あぢさゐ

武村　利子　捌

連衆は額あぢさゐに集ひけり　武村利子
大噴水のしぶき七色　式田和子
兄弟でテレビゲームを競ふらん　猪子春治
スナックがしはすぐにからっぽ　鎌倉かよ子

月出でて話これより佳境なる　山田歌子
膚にまつはる新絹の服　田辺宏子
うそ寒に猫で隠したキスマーク　治
駐車違反をベタと貼られし　歌
暴動に経済摩擦多事多難　宏
帰命無量寿如来　利

初場所（ナオ）の若貴婆も見たがりて　和

勤務了ふ頃冴ゆる三日月　治

西班牙へ行かふと友と誘ひあふ　歌

紳士の仮面さっと脱ぎすつ　か

滝登る鯉の刺青いっぱいに　和

お酒飲みつつ嬰の看病　宏

志消（ナウ）えて母恋ふ子守唄　歌

洗たく竿に止まるてふてふ　か

見はるかす吉野の山は花渡る　宏

宴盛りに揚雲雀翔つ　治

平成四年六月二十四日　首尾

於　名古屋住友クラブ

薄　暑

方丈の縁広やかに薄暑かな　橘　文子
軒釣忍揺れて傾く　豊田好敏
泣き笑ひ子の長電話きりもなし　畑山レイ
またも買ひ来るせんべスナック　加藤道子

橘　文子　捌

世界一周当ててセーヌの橋の月　道
服はお対の流行新絹　イ
唇を許す迄なり牧閉す　敏
嫁こ決ってまんづよかった　道
ＰＫＯ裏取引もあらはにて　敏
言葉捜しつ見舞ふ病床　道

たひらげし三人前の桜鍋　敏

寒月光に濡るる舗装路　イ

石塀に暴力団の屯して　同

がんじがらめの紐も運命か　道

喘ぎつつ抱けば妖し蛇と化す　文

白赤ロゼのワイン在る棚　イ

名を刻む栄誉のカップ燻銀　文

春は愉しとくちずさむ歌　道

眺むれば山里覆ふ花の雲　敏

お玉じゃくしを掬ひやる祖母　イ

平成四年六月三日　首尾

於　鎌倉中央公民館

烏瓜

塚本　泰子　捌

ひとつづつ等間隔の烏瓜　瀬木志津

重曹でとる栗の渋皮　塚本泰子

橋までを月のかけらに照されて　今村すま子

お茶当番を定めるじゃんけん　五味蓉子

母叔母（ウ）の着物着られる年となり　内田麻子

抱き寄せられて袖のほつるる　庄司美代子

おきまりのカラオケとなりふたり酒　麻

ブッシュ決戦七日後となる　蓉

燃えしまま夕日が落ちる水平線　す

蚋に刺されて休む教室　美

青祈(ナオ)禱薄の箸で餡飩食べ　志

タウンページに載りしペンキ屋　す

十代の夫婦いちゃつき遅出勤　泰

電車の中では遠慮してよと　麻

夜スキーゲレンデの灯に月かすみ　蓉

狸に餌づけしてる番頭　麻

丹(ナウ)念に皺描かれたる吾の顔　志

凧揚遊び子も草臥れて　美

山間の川にたゆたふ花筏　泰

見え隠れして行く遍路笠　蓉

平成四年十月二十六日　首尾

於　梶が谷房連庵

夏深し

長崎　和代　捌

夏深し籬の間の波の色　長崎和代

片蔭拾ふ公園の径　梅田利子

珈琲の豆の吟味もねんごろに　百武冬乃

棚に並びしパイプさまざま　山崎一恵

碁仇の友を呼び出す月今宵　八角澄子

毛脛にすがる縁の溢れ蚊　利

そぞろ寒初恋の女ふと思ひ　恵

キャンセル待ちの逃避行なり　利

シャモニーの氷河にばさと大烏　澄

鐘撞堂を守り老いゆく　乃

お出入(ナオ)りの芸賑やかに年取膳　利

枝炭ほのと香り立つ月　乃

クルーザーロールスロイス持つが夢　同

づう体ばかりでかい幕下　利

つり上げて熱き抱擁ままならず　恵

異国の人と交す睦言　澄

信濃(ナウ)にてガレのラムプに出合ひたる　乃

日曜農夫畑を耕し　代

ひとひらの花びら浮ぶ茶碗酒　恵

ひょっこり帰る子猫親猫　澄

平成四年七月二十九日　首尾

於　源心庵

曝書

中島　啓世　捌

受けつぎし漱石全集曝しけり　藤田克子

白絣着て留学の街　橋本満喜

鳶の笛聞えて海のおだやかに　牧岡歌子

カフェテラスでお茶にしましょう　藤井弘美

ゲ(ウ)ルトの丘に登れば月ドナウ　橋本六三

寄りそひしまま草もみぢ径　山本八子

芭蕉葉の陰に二人は声もなし　井上哲也

迷ひし亀にふるまひの酒　歌

笛吹きの薬罐鳴り出す昼下り　也

盛りも上らぬ参院選挙　三

大鳥居道まっすぐに白椿　克
夜咄の茶事細き月かげ　美
寝不足の今日のショットはぶれやすく　喜
湯の町エレジー俊郎はいま　歌
忘れじの女を偲びて旅に出ん　三
いとし蹠目くるめく恋　八

占ひは巷にあふれ猫だまし　同
仏生会にはお説法きく　美
花吹雪漓江下りの笠の上　喜
天空を翔ぶ山蜂の王　也

平成四年七月二十二日　首尾
於　橋本邸

山眠る

中田あかり　捌

山眠る盆地の北に移り住む　中田　あかり

霜覆せる庭のそこここ　滝川　雅代

リハーサル琴と笛の音よく和して　若尾　よしえ

クッキーこんがり啜るコーヒー　篠原　達子

新松子学生街の賑やかに　子

文化祭には家族打連れ　代

美少女の深きゑくぼを愛づる月　同

バストさまよふ目線眩しげ　え

名物の餅入まんじゅう羽が生え　代

若さと変化望む米国　え

いっ(ナオ)気呑みたちまち胃の腑反乱す　子

倶利伽羅不動願かけの列　代

法王庁やっと風穴地動説　子

ナイター打球月に吸はれし　同

抱き合ひ葎の褥ふみしだき　代

猫が跳び出しびっくりの恋　え

夢(ナウ)の弧を新しき橋湾に画く　代

目刺焼きつつ老のきやすさ　り

一重八重挿頭(かざし)の花を分け合ひつ　え

友とのどかに語る広縁　子

平成四年十一月八日　首尾

於　光ケ丘近隣センター

木の実降る

原田　千町　捌

木の実降るまたひとつ降る過去未来　原田千町

湖の彼方を昇り来る月　東郁子

美術展初入選を知らされて　若尾よしえ

豆大福に淹れる焙じ茶　五十嵐譲介

パレード（ウ）の音華やかに角をゆく　橋本京子

ひときは眉目秀麗のひと　郁

よろよろと酔ったふりして触れる肌　え

いちどで懲りる火水母の毒　介

政界に金欲のエゴあからさま　同

子供の夢の宇宙教室　郁

縄(ナオ)文の杉が根を張る島もある　介

やんばるくいなやっと撮影　京

寒月に白粥すする病みあがり　同

雪女郎来る夜ごと夜ごとに　町

三つ四つ恋の掛け持ち神頼み　郁

猫族はみなそっけない性　介

古(ナウ)稀すぎて人の情けの有難し　え

チュウリンゲンより春便り受け　同

観覧車ゆっくり廻る花の山　郁

方丈の軒蜂の巣作り　京

平成四年十月十八日　首尾

於　光ケ丘近隣センター

藤の風

東　郁子　捌

反橋や四方より寄する藤の風　東　郁子

人のあはひを縫へる蝶々　中田　あかり

春炬燵色名帖を開きゐて　上月　淳子

回覧板の判取りに立つ　副島　久美子

ギヤマンの壷に妖しく月の影　船本　志紅

夏痩せしたねとそっと囁く　八代　良子

遊学の果の同棲知らぬ親　淳

邦人ばかりナポリ・ポンペイ　美

酔ひしれて株の値下り愚痴り合ひ　紅

猫に戒名つけて葬る　淳

木(ナオ)の葉髪ばっさりと切りアデランス　り

ラグビー観戦通ひづめなり　良

この頃は男子厨房流行し　美

心こめつつ菊枕など　淳

書き置きを月の照らして君何処　美

フェンスに揺るる鵙の早贄　良

わん(ナウ)こそば年齢に似合はず健啖に　郁

孫子集まり歌も賑やか　良

神父来て洗礼式の花吹雪　り

夢の如くに霞む山々　紅

平成四年四月二十六日　首尾

於　亀戸天神社

買初や

買初やまことましろき牛の乳　百武冬乃
　芋の頭の鉢に三つ四つ　佛渕健悟
父と子の釣の相談まとまりて　乃
　トランシーバー電池入れ替へ　悟

文音

おしのびの宮に玲瓏初月夜　乃
　雁渡るらし閨の天辺　悟
我が恋ふはヨカナーンの首ゆく秋に　乃
　武器商人のちらと目配せ　悟
薬草のとなり蛍のたたき売り　乃
　避暑地名ばかり駅の喧騒　悟

ホール（ナオ）インワン保険をかける切なさよ　同

貰った犬は狸そっくり　乃

盃持てばすぐ赤くなるお師匠さん　悟

見えぬところの消えぬ刺青　乃

抱き合ひて月の氷湖の音に佇つ　悟

ただしんしんと神ゐます杉　乃

CO_2（ナウ）規制急務の声高く　悟

風光る中ＶＩＰ到着　乃

本堂を眼下に花のロープウェイ　悟

汐干の岩の形小さく　乃

平成四年五月十五日　首尾

高遠の花

文音

いのちなりまた高遠の花に遭ふ　福井隆秀

山の棚田も畦塗りの頃　東明雅

亀鳴けり少壮詩人眉あげて　秀

頭韻は酒脚韻は猫　雅

望郷の想ひ切なく月今宵　秀

恋の心の不知火と燃え　雅

いとはんの死ぬの生きるの冷まじき　秀

知らぬ顔して半跏思惟像　雅

接待のビフテキ食べて歯を毀し　秀

いささか呆けし父の日の父　雅

座敷(ナオ)には昔のままの夏暖簾　同
桂讃へしタウト読みつぐ　秀
そぞろ神肩のあたりに取りつきて　雅
雪見かこつけ誘ひ出す秘書　秀
小夜千鳥月の河原のラブホテル　雅
横文字ばかり流行る昨今　秀

「もっこす(ナウ)」と呼ばるる性の世にあはず　雅
ひたすら糸を垂るる乗っこみ　秀
このごろの雨やはらかにねぢあやめ　雅
師弟ともども集ふ炉塞　秀

平成四年四月二十五日　起首
平成四年七月三日　満尾

赤とんぼ

佛渕健悟

あちこちでほころぶ地球赤とんぼ
月やや寒く泛かぶ火口湖

坂本孝子

喫茶室秋惜しみつつ語らひて
高層ビルに望む町並

悟子

両吟

サングラス飽くなき野望秘めてをり
豊かな胸の薔薇の香を吸ひ

悟子

千年の眠りより覚め女神像
聖なる牛の糞で壁塗る

悟子

切々と捜索願ふ国の者
択捉にまた雪のくる頃

悟子

葡萄酒（ナオ）のグラスに踊る暖炉の火　同

売れぬ絵描きをいつも贔屓に　悟

人生の岐路過つも恋故か　子

忘れ形見の髪のちりちり　悟

緑陰に鳩の餌を撒く昼の月　同

本日休診文債はまだ　子

横丁（ナウ）は質屋魚屋提灯屋　同

春の遊びの回覧が来る　悟

近松の舞台の花を浴びて逝く　子

熊野の海の凪て麗か　悟

平成四年十月十三日　首尾

於　調布シュベール

竹伐り

本田八重子　捌

竹伐れど竹の心をまだ知らず　豊田好敏

納屋の軒端にかかる夕月　本田八重子

茸飯母の自慢を山盛に　橘　文子

好きな器の少しづつ増え　畠山れい

狐火（ウ）は阿寒の湖を耀かす　高橋信子

ピリカ女の子の鳴らすムックリ　れ

三輛目いつもの彼の乗る予感　信

中吊小説恋のあれこれ　好

出戻りのペローも立って選挙戦　文

景気ねがひに祈る赤星　好

薄(ナオ)白き蛇の抜け殻拾ふ人　信

歌舞伎役者の衣の引き抜き　文

太腿の「命」刺青消し切れず　好

捧げし想ひ悔むこの頃　同

冬月のさして程良き椅子の位置　れ

老のひとりを酒に楽しむ　信

嫁(ナウ)姑カラオケルームに鉢合せ　文

景品として配る種物　れ

夢に見し故郷いつも花の中　八

黄金週間野球庭球　信

平成四年十月七日　首尾

於　鎌倉中央公民館

山茶花

夕闇に山茶花白き遊歩道　町田順風

草の葉陰に残る虫の音　稲葉道子

留学の弟子の窯出したのしみに　若尾よしえ

たばこをふかしつまむ大福　小野シズ

町田順風　捌

穏(ウ)やかな波に島影映す月　え

婚約発表笑顔爽やか　ズ

祝賀会新酒の香りに早や酔ひぬ　越野文子

旅行鞄に入れるCD　ズ

ガウディの聖堂で合ふ日本ツアー　道

警察犬は麻薬嗅ぎ分け　ズ

行水（ナオ）がいやだいやだと逃げる孫　文

縁台将棋月は煌々　ズ

献金を山と積まれてついその気　風

貴兄百才私九十　え

東京湾観光船でひとめぐり　道

ナイフとフォーク箸ととりかへ　え

旗（ナウ）振って駅伝マラソン応援す　文

ぴちぴちはねる乗込みの鮒　え

鐘を撞く僧衣にしきり花吹雪　道

吸ひこまれさううらかな空　文

平成四年十一月二十九日　首尾

於　梅丘会館

葉鶏頭

松田多恵子　捌

垣越しにひときは高し葉鶏頭　小原正子

白き月見る谷戸は露寒　松田多恵子

新しきラベルの新酒送りきて　豊田好敏

隣の犬のよく吠えること　本田八重子

鶴渡る釧路湿原燃えしあと　敏

顎をそっと包む襟巻　八

独り身は膝をかかへて人恋し　正

十九・二十ではや所帯持つ　同

西に富士東に筑波熱気球　敏

鮎解禁を待ちし釣竿　八

連(ナオ)れ立ちてぼんぼり巡り夏祓　正

お化屋敷のバイト見つけて　敏

生くべきか生かざるべきかハムレット　正

面子こだはる政界の垢　八

帯解きて睦む冷たき月の閨　敏

男眠らせ先きに帰りぬ　八

院(ナウ)長に叱られはっと夢が醒め　同

わさび醤油で食べる海胆飯　正

入学の児等に祝ひの花吹雪　多

忙しさうに蜂の飛び交ふ　敏

平成四年十一月四日　首尾

於　鎌倉中央公民館

白桔梗

一軸は大道無門白桔梗　東　明雅

秋の扇のまだほしき部屋　豊田好敏

満月に向かひ旅立つ人ありて　青木秀樹

浮遊しながら子等に教へる　佐古英子

松本　碧捌

古楽器の音もさえざえユリシーズ[ウ]　松本　碧

言ひ寄る男ちぎっては投げ　敏

見るからに清楚清純幼な顔　樹

阿修羅の像に哀愁の翳　雅

「ペペルモコ」「外人部隊」「巴里祭」　英

ちぬの刺身であふる冷酒　敏

飛脚(ナオ)便困ったものを配達し　雅

カラシニコフが組に出回る　樹

色丹の熊穴に入る月明り　英

あらぬ姿で誘ふ雪女郎　雅

バスト百ヒップ小錦クラスにて　碧

三十三キロ生きる限界　英

山駆(ナウ)ける高地民族今の世も　樹

軍鶏をたたいて丼の春　敏

満開の花から花へ廻り道　碧

ふらここゆする若き日の夢　英

平成四年九月十七日　首尾

於　電通連句会

秋近し

峯田政志

秋近し葉書によする詩ごころ
月下美人の香の満つる部屋

式田和子

美術館化粧直して待つならん
うっかり抱く孫の重たし

文音

志子

同郷[ウ]の友と献酬十三夜
水澄む渕にひそと佇つひと

志子

予定日をいふは恥かし青蜜柑
自費出版の稿に朱ペン

志子

巣造りにビニール綴る鳥も居て
俄農夫は鎌で脛切る

小芝居の果ててまはりし年の市　同

煉炭火鉢猫も店番　志

無造作にトカレフみゆる旅鞄　子

夢のごとくに過ぎし後朝　志

有明の蛍は平家公達か　子

涸れ井戸覗く若き等の声　志

寝て待てど果報来ぬまま老いにけり　子

北窓開きストレッチする　志

遠景の舟に一本花大樹　子

音和やかに暖かき雨　志

平成四年七月十八日　起首

平成四年九月十二日　満尾

秋の陽

村田　冨美　捌

秋の陽に猫遊びゐる波止場かな　村田冨美

月見だんごを飾る店先　秋元正江

二科展へ搬入の絵に筆入れて　水鳥ますみ

書架よりちょっと借りる児の辞書　真田光子

袈裟（ウ）脱いで住職のかく大胡坐　小林千雪

オゾンの風の吹き通る庭　倉本路子

市振のひとつ家に泊つなさぬ仲　江

襟の小痣を隠すきぬぎぬ　路

いつになくキャリアウーマンどぢを踏み　み

旅行鞄に風邪薬あり　同

寒鮒（ナオ）の甘露煮すこし買ひすぎぬ　路

知りびとの減る父の故郷　光

訪へばあるじは留守の登り窯　同

雨乞ひの神嫉妬めさるな　雪

月中天インカ遺跡に裸身燃ゆ　み

マリアカラスのテープ廻りぬ　光

法（ナウ）の道一途に生きて趣味は酒　雪

掌にとりてみる鶯の笛　美

誘はれしパサニアクラブ花吹雪　路

春泥の丘昇るケーブル　み

平成四年九月八日　首尾

於　熱海パサニアクラブ

散紅葉

矢崎藍捌

散紅葉筧の水をせきとめて　月山壹

隣となりへ移る笹鳴　田中弘子

地球儀に友の居る国探すらん　繁原敏女

ついと割りたるピーナツの殻　大谷規美子

夕月の田は刈り入れを待つばかり　加藤治子

胸の歯車きしむ秋冷　八木聖子

塗り下駄のたれのものにもならぬひと　矢崎藍

捨て石ひとつ坪庭の妙　壹

身に覚えなきことと口揃へたる　小園好

眼の手術金に眩んで　規

蜘蛛（ナオ）の囲の軒にかかれる雨上がり　女

茶の木でしきる故郷の墓地　聖

自転車の相乗りもして筒井つつ　弘

猫語に猫語にゃんと冬月　敏

蜜柑吸ふ男たらしの薄き唇　聖

ニューヨークより長きファックス　後藤志津枝

円空（ナウ）仏真贋分けし鉈のあと　治

隧道出でて春のさざなみ　藍

花爛漫みどり児の掌に香る乳　聖

人ごみのなかゆれる風船　すが

平成四年十一月十七日　首尾

於　猿投公民館

時雨るるや

山口みづゑ　捌

時雨るるやをみな等集ふ絹の道　山口みづゑ

指の先まで香る文旦　八角澄子

ト長調ピアノソナタの聴え来て　高瀬美保

飛出す絵本片言で読み　上月淳子

陶(ウ)榻に酔ひさましをり二日月　塚本泰子

秋の袷の乳房ふくよか　瀬木志津

会長の妻を連れ出す紅葉狩　内田麻子

かるかん饅頭湯気のほかほか　長谷えみ子

初誕生迎へし姫のすこやかに　五味蓉子

まりよく受けるチャウチャウが好き　今村すま子

緑陰（ナオ）に無人のジープ・ムスタング　美
月光げ濡れし蛇の脱け殻　志
昔から男は逃げる道成寺　蓉
元硬派今ホモセクシュアル　淳
やけ喰ひの果て精を出すジム通ひ　え
日米野球たった一勝　麻

売（ナウ）れ残るリゾートマンション鳩が棲み　澄
里の嫗のクレソンを摘む　み
少女期を偲ぶ疋田の花衣　す
こけし作りに倦みし春愁　泰

平成四年十一月九日　首尾
於　町田ホテルエルシー芙蓉亭

秋近き

若尾よしえ　捌

秋近き心の寄や四畳半　翁

とうすみとんぼ去らぬつくばひ　若尾よしえ

漬加減母はさらりと塩振りて　成田玲子

熱き渋茶で憩ふひととき　老田喜美

ウ

月を待つ鷹の羽薄壷に活け　茂田キヨ子

運動会の玉入れの声　越野文子

手作りの鮭のブローチくれし彼　川澄みよ

ペアールックでロンドン空港　同

王宮の鉄扉重々閉ぢしまま　美

憂ひを秘めし国の内外　文

落書(ナオ)が歴史ゆるがす法隆寺　え

匠の弟子に冴ゆる三日月　稲葉道子

好物の鮟鱇鍋でさし向ひ　キ

酔ひの力で抱きしめる肩　道

楼蘭の美女の木乃伊の生けるごと　キ

砂漠を渡る隊商の列　文

取引(ナウ)の話弾みつ水煙草　美

猫の喜ぶ温きクッション　玲

大空に枝を伸して花万朶　美

幼児の持つ赤き風船　道

平成四年十一月二十三日　首尾

於　伊勢原市ナルセコミニティセンター

能登の冬

若松隆一

雨降れば横なぐりなる能登の冬
堤に凛と枯欅立つ

峯田政志

粥鍋のふつふつ独語聞こえゐて
丹念に繰る複写古文書

一志

文音

尖塔（ウ）にピラミッド持つビルに月
万聖節に初軟派され

一志

抱き合へば真珠さやかに頬触るる
ボギーを真似て飲めば陶酔

一志

トカレフにコルト・モーゼル・バラライカ
刺すやうな目の子らに見られて

一志

夏掛(ナオ)けを贈れば師より筆の文　同

月の暑さに鵺も徘徊　一

女王の城は朝まで煙立ち　志

会へば柳眉の優しげになり　一

呆け・痛風・腎虚それでも愛しくて　志

鳥獣のごと野山駆けたし　一

バウ(ナウ)ハウス話題の区立美術館　志

むらさき志野の眠る春昼　一

国訛り乗せて電話の花便り　志

遍路と共にしばしバス待つ　一

平成四年十一月二十二日　起首

平成四年十一月二十三日　満尾

✲半歌仙

かぎろひ

岩井　啓子　捌

かぎろひの街四次元を向きゐたり　岩井啓子

曲線罫線画く引鳥　式田和子

猫の仔を膝にピアノの稚くて　小林千雪

ミルクティなど甘く匂へる　橘　文子

月の客待ちつ朝からおちつかず　市野沢弘子

風船葛吹く風のまま　同

秋(ウ)かつをむかし覚えし假名使ひ　和

院殿戒名相場茫然　同

生霊に苦しめられて不眠症　雪

氷の目セン刺さる抱擁　文

ベルモンド男シラノを演じきり　同

米も自由化酒も自由化　和

延々と赤松林夏の月　雪

運転席はてんと虫乗せ　文

旅ライターこの道だけは教へない　和

齢百歳名水の郷　啓

球児らの喚声聞こゆ花の蔭　文

春いちご盛るマイセンの皿　弘

平成四年三月二十五日　首尾

於　新宿朝日カルチャー教室

夏蝶や　真田光子　捌

夏蝶や峠の茶屋の緋毛氈　真田光子

敦盛草のふくらみし母衣　秋元正江

フルートを吹きつつ曲に乗りゆきて　倉本路子

クッションに刺すクロスステッチ　小林千雪

新月に小犬の眠り深くなる　村田冨美

麺麭買ひに出るやや寒の街　路

秋祭御輿担ぎの集まらず　江

自治会長の転ぶをどり場　雪

ふるさとは能登の七尾の線路沿ひ　美

襟を返して払ふ借金　路

又造の画集の裸婦に魅入られぬ　雪

雪の精抱く夢のはかなさ　美

糟湯酒はらわたまでも滲み渡る　江

リバーシブルの本音建前　路

生涯の想ひ出秘めしサハリンへ　雪

数珠子の紐の沈む沼辺り　光

花かがり大きみほとけてらす月　江

まろき柱に倚りしおぼろ夜　美

平成四年五月十一日　首尾

於　深川芭蕉記念館

夏立つ

下鉢　清子　捌

錦木のさ緑に夏立ちにけり　下鉢清子

更衣して鯉眺む人　瀧川雅代

ギャマンのコンソメスープ運び来て　久保田庸子

エレクトーンの軽やかな曲　長崎和代

語り合ふ大学構内月高く　渡辺秋景

二科展出品額縁を買ふ　神谷安子

旅ウの苞灘の新酒の薦被　須田智恵

農協改名突如J・A　安

ひとめ惚れ婚約すんなり整ひぬ　恵

シークレットシューズ履ける婿殿　庸

ジョーカーを引いて運命一転し　雅
やうやく馴れた野良公の猫　景
峯の月炉話いよいよ佳境なる　庸
仕込みの済みし寒味噌の樽　和
神仏無病息災祈願して　景
良寛様の書を写す男　安
石割りの老木今日の花盛り　雅
蝶の化身となって舞ふ夢　和

平成四年五月五日　首尾
於　深川芭蕉記念館

引鶴や

八角　澄子　捌

引鶴や急がぬ旅を七尾まで　八角　澄子

鞄にそっとひそむ春愁　梅田　利子

焙炉師の揉みし茶の香の立つならん　下坂　元子

隣部屋よりミシン踏む音　瀧川　雅代

そぞろ寒月皓々と照らしゐて　山崎　一恵

遊び散らせしままのべい独楽　利

秋味の溯上を見んと橋の上　同

ヴィオラのケース提げて足ばや　元

神父様おひげ丸帽笑みこぼれ　同

馬刺猪鍋純米の酒　恵

農村の嫁のひでりをかこち合ふ　代

色浅黒く甘き体臭　恵

ヨットの帆傾き隠すキスシーン　同

淡くかそけし夏富士の月　代

忘れじと思ひつ忘るけさのこと　澄

ワープロで打つ般若心経　代

西行の庵に降りつぐ花吹雪　利

峡をななめにすがる飛びゆく　元

平成四年四月六日　首尾

於　新宿滝沢

絵蠟燭

本屋　良子　捌

絵蠟燭買ふ出格子や山法師　松村あや

藍ののれんに渡る涼風　本屋良子

ティールーム無人ピアノを聞くならむ　川治敦子

ソファーに深くパイプくゆらす　柴田由乃

城郭の肩にかかりし望の月　成瀬貞子

ひとしきり鳴くすいっちょの声　や

蜂[ウ]の仔に一合で足る越の酒　敦

粋な尼さん連句たのしむ　乃

神々の午睡の刻にキス盗み　貞

融けてしまへり潮騒の中　や

船端に人喰鮫の体当り　貞
ＰＫＯに牛歩戦術　良
冬の月道化師銀の笛を吹き　乃
凩の野に旅硯置く　敦
李白読む片袖机古びたり　や
身にそなはりし立居ふるまひ　貞
揺れをりし遊動円木花の下　良
那須の麓に百千鳥鳴く　貞

平成四年六月十八日　首尾
於　岐阜　本屋宅

百韻

百韻　酔芙蓉

酔芙蓉八丁堀はビルの街　秋元　正江
　鳴きはじめたる秋蝉を聞く　小林　千雪
様々に茸もてなす月待ちて　蒲原志げ子
　ちょっといっぷく渡す灰皿　篠原　達子
飾り棚詩集句集の積まれをり　金久保淑子
　伸びする猫の肢はやはらか　豊田　好敏
冬景色フルートを吹く人無心　江
　極太毛糸セーターの子よ　雪
聖母像ぬかづき仰ぐ日曜日　志
　戦場へ発つ彼を送りて　達
路地奥の部屋に籠りしオンリーさん　淑
　五輪メダルに付きし賞金　敏
ＦＡＸのやたらに多き宵の口　江

膝送り

くらげ来たぞと月の水門　雪
夏狂言怖さ見たさの指隙間　志
　看護疲れで逝きし幽霊　達
密造の酒を酌み交ひのっぺ汁　淑
　署長校長マイク取り合ひ　敏
裏山の動物園も寝静まり　江
　三崎坂を降りて〝伊勢辰〟　雪
走り根にすべってころぶ花行脚　達
　鯛の浜焼かぶる編み笠　志
二ォ小半刻春雷とまる古屋根に　敏
　自慢の壷に細き貫入　淑
ワンレンを束ねてほぐし撫でる我　雪
　鏡よかがみ悪魔いとしき　江
甘き蜜むぐらの床にしたたれる　達
　力いっぱい蝿叩く婆　志
イタリアのくるま流れる様な線　敏
　エンブレムには王家紋章　淑
情報を推理作家は書き留めて　雪

躁の食欲これぞ本命　江
診療所慰安旅行で手薄なり　志
おけら詣りの火縄ぐるぐる　達
寒稽古帰る剣士を照らす月　志
故郷名水スーパーで買ふ　敏
何ウもかも釦一つで暮らすわざ　淑
死亡日時は半年も前　雪
炎天の路上にひさぐ肉の塊　江
ラマンダ終り運ぶ大皿　達
偽物と知って買ったが本物で　志
青い鸚哥はなにも言はない　敏
乞はれしがマザコン亭主そぞろ寒　淑
稲架の陰から寝とられし夫　雪
月昇る和尚蔀戸開け放ち　江
遠山まぶし風の音聞く　達
銀行の危機とマスコミかしましい　志
持たざるものは身軽気軽よ　敏
紅白の餅花かける太柱　淑

毛衣を着た棟梁が佇つ　江
この辺り『わに』と名付けて鮫料理三オ　志
安来会館けふは満員　達
選ばれてスペースシャトル星のくに　淑
紙一重なる狂と天才　敏
いれこ函極小となり収まれり　江
親にもらいし汗の指先　雪
田植機の工合を試す畦の道　志
庚申様に飴そなへあり　達
師と弟子の婚前旅行風呂は別　淑
落ちぬ紅ひく君の寝化粧　敏
ミロの絵のサイケデリック額のなか　江
鈴虫むくろ籠にからびぬ　雪
月今宵文台まはす源氏香　達
焼き栗いかが四つ辻の角　志
トカレフを受け渡しする地下酒場ウ　淑
野球のスコア黒板にかけ　敏
壊れたる血圧計をはふり出す　淑

樹氷きらめく森を眺めて　雪
待つ男は〝蒼き狼〟騎馬の長　志
後宮の美姫うれひみちたり　達
宝塚乙女の胸に春の夢　淑
磯巾着のゆれる岩陰　敏
清明の月ぼんやりとのぼりゆく　江
年金暮らし利息下がりて　雪
経験も生かす術なし神そっぽ　志
ＣＭに出る猫の飼ひ主　達
吟行会余花で名高き古き苑　敏
円座置かるる待合の縁　淑
時鳥今年初めて聞きにけり　江
縫ひ針の錆みがきゐる時　雪
縮緬のファッション世界を席捲す　志
水惑星に進む公害　達
廻し読む古典科学も桃尻語　敏
薬喰ひとて爺に焼き肉　淑
片時雨み寺の礎石濡らしたる　江

はばからず言ふどれが秘めごと　雪
土壇場で心中道行逃げ出して　志
外連みえみえ陳腐軽薄　達
〝吉本〟の芸人達のものすごく　江
菊の主と看板をかけ　敏
又一戸減る山里の居待月　淑
無煙グリルで秋刀魚焼きあげ　雪
えひしれるハードロックのベイサイド　志
高速道路続く渋滞　達
生涯の保険契約群を抜き　淑
庭に据ゑたる父の銅像　敏
継ぎはぎの縄文の土器容よく　江
弥生尽には決まる転勤　雪
爛漫の花よ百韻巻き終へて　志
寝覚の床に匂ふオレンジ　達

平成四年八月二十四日　首尾
於　東京八丁堀勤労福祉会館

あとがき

猫蓑作品集Ⅲをお届けいたします。

本集は平成四年度の会員の作品集で、例年のように歌仙・二十韻（半歌仙）について、夫々捌一名について一作品という枠の中での応募作品、今回は特に百韻一編が加わりました。明雅先生の序文にもありますように、私たちの目ざす連句文芸は、高く深く限りなく遠いものがあります。牛歩でも良い、只管精進を続けることが意義あることと思いつつ、纒めのお手伝いをさせて頂きました。

この度も八の会の梅田利子・下坂元子・瀧川雅代・八角澄子・山崎一恵の諸氏に秋元正江氏が校正に加わって下さいましたこと感謝申し上げます。

平成五年三月吉日

下鉢清子

猫蓑作品集 Ⅲ

平成五年三月吉日

発行人　東　明　雅

発行所　猫　蓑　会

定価　一、八〇〇円（送料実費）

印刷所　株式会社　岩田印刷